

大分県文化財調査報告書 第80輯

# 下郡桑苗遺跡

七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書

1989

大分県教育委員会

大分県文化財調査報告書 第80輯

# 下郡桑苗遺跡

七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書

1989

大分県教育委員会



Ⅲ区13層 ブタ(No.1)の出土状態



Ⅲ区13層 ブタ(No.3)の出土状態

## 序 文

このたび大分県教育委員会では、大分市下郡において米良バイパスに伴う七步川河川改修工事に関連し、埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

この調査の結果、本県としては稀な弥生時代の木製農耕具・生活用具類を多数発掘するとともに、わが国初の弥生時代の家畜動物遺体を検出するなど小規模な調査ながら予想を上回る成果をあげることができました。本書はそれらの成果を集約したものであります。

文字を知る以前の人間の歩みは、発掘調査という地道な作業の積重ねによってしか解き明かすことができません。本書が、そのような埋蔵文化財への理解と保護意識を深める一助になるとともに、学術・研究の資料として多くの人々に活用していただけることを願う次第です。

最後になりましたが、発掘調査から出土資料の整理・報告書作成に至るまで、埋蔵文化財の意義を理解され、御協力をいただいた大分県土木建築部をはじめとする関係諸機関・指導委員の先生方、他関係の皆さんに深甚の謝意を表わす次第であります。

平成元年3月31日

大分県教育委員会教育長

嶋 津 文 雄

## 例 言

1. 本書は、大分県土木建築部の委託により大分県教育委員会が実施した七步川改修工事に伴う大分市下郡桑苗遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、1988年8月22日～9月9日に実施した。
3. 遺構の実測は高橋信武（県教育庁文化課主任）・船貫俊一（同主事）が行い、遺構・遺物の撮影は高橋が担当した。遺物の実測・整図は木器を牧尾義則（同主査）が、その他を高橋が行った。調査以前に採集された木器の撮影は、大分市歴史資料館玉永光洋氏による。
4. 自然科学的方法による分析を下記の方々に依頼し玉稿をいただいた。

|                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 植物遺物分析               | 粉川 昭 平（大阪市立大学教授）      |
| 花粉分析                 | 畑 中 健 一（北九州市立大学教授）    |
| 動物遺体分析               | 西 本 豊 弘（国立歴史民俗博物館助教授） |
| プラント・オパール分析          | 佐々木 章（大分短期大学助教授）      |
| 地理学的分析               | 出 田 和 久（大分大学助教授）      |
| C <sup>14</sup> 年代測定 | 木 越 邦 彦（学習院大学教授）      |
| 樹種同定                 | 小 田 一 幸（九州大学助教授）      |
|                      | 津 島 俊 治（大分県林業試験場技師）   |
5. 上記以外の執筆は、牧尾・高橋・船貫が分担し、編集は高橋が行った。
6. 遺跡発見時に、柴田義弘氏・尾藤邦夫氏により採集された資料も本書に収録させていただいた。その木器類は大分市歴史資料館に保管されている。
7. 調査にあたり、大分県大分土木事務所・大分市下郡区調整理事事務所・大分市中高年雇用福祉事業団の協力を得、また大分市教育委員会の讃岐和夫氏・坪根伸也氏より、現場で種々御教示を得た。あわせて謝意を表わしたい。
8. 本書に使用した方位のうち、遺構の実測図には磁北を用いた。
9. 発掘調査で出土した遺物は、文化課文化財資料室に保管している。
10. 遺跡名は初め下郡北遺跡としていたが、字名を用いて下郡桑苗（しもごおりくわなえ）遺跡に変更した。

# 目 次

序

例 言

|                           |             |    |
|---------------------------|-------------|----|
| 第1章 調査の経緯                 | (高橋信武)      | 1  |
| 1. 調査に至る経過                | ( " )       | 1  |
| 2. 調査体制                   | ( " )       | 1  |
| 第2章 遺跡の立地と歴史的環境           | ( " )       | 3  |
| 第3章 発掘調査の成果               |             | 4  |
| 1. 調査区の設定                 | ( " )       | 4  |
| 2. I 区 の 調 査              | ( " )       | 4  |
| 3. II 区 の 調 査             | (綿貫俊一)      | 7  |
| 4. III 区 の 調 査            |             | 9  |
| (1) 調査区について               | (高橋信武)      | 9  |
| (2) 層 序                   | (綿貫俊一)      | 9  |
| (3) 土 器                   | (高橋信武)      | 12 |
| (4) 石器・石製品                | ( " )       | 18 |
| (5) 木 器                   | (牧尾義則)      | 19 |
| 5. IV 区 の 調 査             | (綿貫俊一・高橋信武) | 30 |
| 6. 縄文時代の遺物                | (高橋信武)      | 32 |
| 7. 採集資料(土器・骨器)            | ( " )       | 32 |
| 第4章 出土遺物について              | (高橋信武・牧尾義則) | 35 |
| 第5章 自然科学的方法による調査          |             | 40 |
| 1. 下郡桑苗遺跡出土の大型植物遺体        | (粉川昭平)      | 40 |
| 2. 下郡桑苗遺跡第Ⅲ区堆積物の花粉分析      | (畑中健一)      | 44 |
| 3. 下郡桑苗遺跡の放射性炭素年代測定結果について | (木越邦彦)      | 47 |
| 4. 下郡桑苗遺跡出土の動物遺体          | (西本豊弘)      | 48 |
| 5. 下郡桑苗遺跡のプラントオパール分析      | (佐々木章)      | 62 |
| 6. 下郡付近の地形環境              | (出田和久)      | 65 |
| 7. 下郡桑苗遺跡出土木製遺物の樹種同定      | (津島俊治・小田一幸) | 68 |
| 第6章 まとめ                   | (高橋信武)      | 77 |

## 挿 図 目 次

|      |                     |    |
|------|---------------------|----|
| 第1図  | 下郡桑苗遺跡の位置と周辺遺跡分布図   | 2  |
| 第2図  | 調査区位置図              | 3  |
| 第3図  | 調査区配置図              | 4  |
| 第4図  | I区平面図・土層図           | 5  |
| 第5図  | 1号貯蔵穴実測図            | 6  |
| 第6図  | I区出土遺物実測図           | 6  |
| 第7図  | II区平面図・土層図          | 7  |
| 第8図  | II区出土遺物実測図          | 8  |
| 第9図  | III区土層図             | 10 |
| 第10図 | III区11~13層遺物出土状況実測図 | 11 |
| 第11図 | III区13層出土遺物実測図      | 12 |
| 第12図 | III区12層出土遺物実測図      | 13 |
| 第13図 | III区11層出土遺物実測図      | 14 |
| 第14図 | III区11層出土遺物実測図      | 15 |
| 第15図 | III区11層出土遺物実測図      | 16 |
| 第16図 | III区11~3層出土遺物実測図    | 17 |
| 第17図 | III区出土石器・石製品実測図     | 18 |
| 第18図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 1        | 21 |
| 第19図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 2        | 22 |
| 第20図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 3        | 23 |
| 第21図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 4        | 24 |
| 第22図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 5        | 25 |
| 第23図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 6        | 26 |
| 第24図 | 下郡桑苗遺跡出土木器 7        | 27 |
| 第25図 | IV区土層図              | 29 |
| 第26図 | IV区と排土から採集した遺物の実測図  | 30 |
| 第27図 | 縄文時代遺物と柴田義弘氏採集資料    | 31 |
| 第28図 | 下郡桑苗遺跡出土木器層位別分類図    | 38 |
| 第29図 | 大分県内弥生時代遺跡出土木器      | 39 |

## 表 目 次 (第5章以外)

|    |                    |    |
|----|--------------------|----|
| 表1 | 下郡桑苗遺跡出土木器一覧表      | 28 |
| 表2 | 下郡桑苗遺跡出土遺物観察表 1    | 33 |
| 表3 | 下郡桑苗遺跡出土遺物観察表 2    | 34 |
| 表4 | 西日本を中心とした動物遺体一覧表 1 | 79 |
| 表5 | 西日本を中心とした動物遺体一覧表 2 | 80 |

## 図 版 目 次

|      |                      |    |
|------|----------------------|----|
| 図版1  | 下郡桑苗遺跡近景・調査風景・Ⅱ区水田遺構 | 83 |
| 図版2  | Ⅲ区近景                 | 84 |
| 図版3  | Ⅲ区の遺物出土状態            | 85 |
| 図版4  | Ⅲ区の遺物出土状態            | 86 |
| 図版5  | 下郡桑苗遺跡の遺物(土器)        | 87 |
| 図版6  | 下郡桑苗遺跡の遺物(土器)        | 88 |
| 図版7  | 下郡桑苗遺跡の遺物(土器)        | 89 |
| 図版8  | 下郡桑苗遺跡の遺物(石器・採集品)    | 90 |
| 図版9  | 下郡桑苗遺跡出土木器           | 91 |
| 図版10 | 下郡桑苗遺跡出土木器           | 92 |
| 図版11 | 下郡桑苗遺跡出土木器           | 93 |



# 第1章 調査の経緯

## 1. 調査に至る経過

下郡桑苗遺跡は大分市大字下郡字桑苗に所在し、大分川によって形成された沖積地に立地する。従来、この辺りは都市近郊の農村地帯であったが、市中心部に近いことなどから再開発の波に洗われており、米良バイパスの建設・整備や土地区画整理事業が進められている。1987年、県教育委員会では米良バイパス沿いに水路工事が計画されていることを知り、試掘調査することとなった。当時、計画地域の側から工事が進行中で、北部では完成しており、中央部では予定線に沿って溝が掘り込まれていた。すでに生活用水路として使用されており、残された南部の未着工部分について試掘調査を実施した。その結果、洪水に伴うと見られる礫層の重なりを確認したが、人為的な遺構は検出しなかった。

1988年、中央部から南側にかけて工事が実施され、今回調査することになった中央部の場所で木器・流木等の包含層が露出し、柴田義弘氏・尾藤邦夫氏等によって教育委員会に通報された。その後、県土木建築部大分土木事務所と遺跡の取扱いについて協議の上、発掘調査によってその内容を把握することとなり、1988年8月22日～9月9日にかけて現地でのトレンチ調査を行った。

## 2. 調査体制

|         |  |                    |
|---------|--|--------------------|
| 調査委託者   | 大分県土木建築部   |                    |
| 調査主体    | 大分県教育委員会   |                    |
| 調査指導    | 橋 昌信 (別府大学教授)  | 佐藤 興治 (大分市歴史資料館館長) |
| 及び協力者   | 粉川 昭平 (大阪市立大学教授)   | 畑中 健一 (北九州市立大学教授)  |
|         | 西本 豊弘 (国立歴史民俗博物館助教授)   | 小田 一幸 (九州大学助教授)    |
|         | 佐々木 章 (大分短期大学助教授)  | 出田 和久 (大分大学助教授)    |
|         | 津島 俊治 (大分県林業試験場技師)   | 山口 譲治 (福岡市教育委員会)   |
|         | 王永 光洋 (大分市歴史資料館学芸調査係長)   |                    |
| 調査総括    | 小代 基康 (大分県教育庁管理部文化課長)  | 阿部 正博 (同 課長補佐)     |
|         | 後藤 宗俊 (同 課長補佐)   | 今永 一成 (同 庶務係長)     |
| 調査員     | 清水 宗昭 (県文化課埋蔵文化財第1係長)  | 牧尾 義則 (同 主査)       |
|         | 高橋 信武 (同 主任・調査担当者)   | 綿貫 俊一 (同主事・調査担当者)  |
| 調査事務    | 西 哲弘 (県文化課主任)  | 神 昭雄 (同主事)         |
| 調査作業協力者 | 押川 隆男・大津エミ子・麻生トキエ・黒島千代子・武本 ハナ・三ヶ尻十一<br>熊谷 初子・甲斐 長一・加藤つゆ子・堤 キクエ |                    |
| 整理作業協力者 | 阿部 嬌子・野上孝子   |                    |

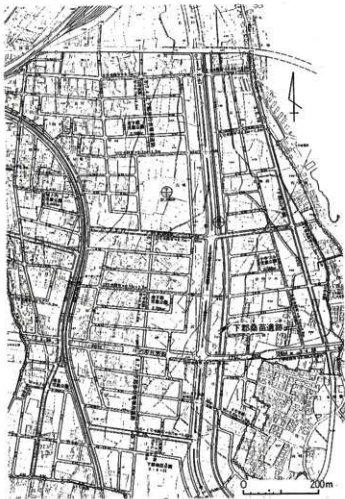


## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

下郡桑苗遺跡は大分市大字下郡にあり、大分川により形成された大分平野の南東部に位置する。遺跡の東方から北方にかけて、標高5mの等高線が湾状に入り込んで低地部をなす一方、西方では大分川に沿って自然堤防の微高地が南北方向に延びている。微高地上には下郡・羽田・片島・津守の集落が帯状に分布し、周辺には水田・畑地が広がっている。このような景観は、弥生時代前期以降に出現したものと推定できるが、本遺跡を含めた周辺部に人間が登場するのは縄文時代後期からである。牧遺跡・下郡遺跡・羽田遺跡・府内大橋下流の遺跡(A・B)といった自然堤防上にある遺跡では、後期から晩期の遺物が出土している。弥生時代になると、下郡遺跡の敷地点の微高地上で、竪穴住居址・貯蔵穴が検出されているが、水田址などは発見されていない。独立丘陵上にある守岡遺跡でもこの時期の集落が検出されている。古墳時代には、新たに鶴崎丘陵の西部縁部に小円墳や横穴墓群が形成されているが、それぞれの前面に位置する集落と結びついて成立したものであろう。律令時代になると、下郡地区は判太郷に、その南方に津守郷が比定されている。下郡遺跡では奈良時代の大型の掘立柱建物跡や、平安時代の井戸が検出されている。下郡桑苗遺跡の北方約300mには、城ノ内・廻向・高城という地名があり中世における本地域を代表する有力者の居館的な遺構の存在が推定されている。

### 参考文献

「大分市史・上・中」大分市1987



第2図 調査区位置図

### 第3章 発掘調査の成果

#### 1. 調査区の設定

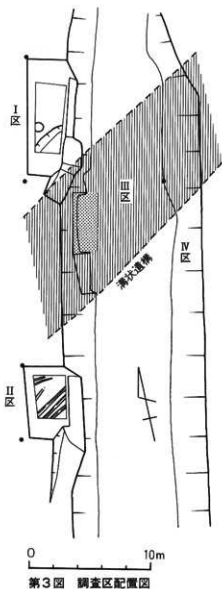
調査はⅠ～Ⅳの4ヶ所で行った。Ⅰ区は今回の調査区としては最も広く、水路に接する南北10m×4mの範囲である。Ⅱ区はⅠ区の南15mの地に6m×4.5mの範囲に設定した。Ⅲ区は水路の西壁の包含層の中心と考えられる場所を中心に、5m×2mで設定し、最終的に約15㎡となった。Ⅳ区は水路の東壁面のことである。混乱を避けるため区毎に別名を変えた。

#### 2. Ⅰ区の調査

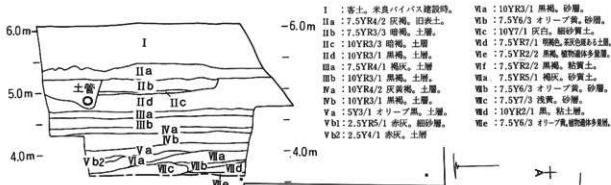
遺跡発見の端緒となった木器包含層近くまで、約2mを重機で掘り下げた後、人力による掘下げを行った。北・南壁には傾斜をつけ、東壁は地表から1.6mほど掘り下げ、西壁は垂直にして途中で段をつけた。

調査の結果、トレンチ南部に南西から北東に長い遺構を検出した。西壁面の観察では、Ⅱd層中に埋土の上面がみられる。その上部土層にも落込み部があるが、これとは無関係と思われる。最初、1号溝と称したが、水路の反対側の面には続いていないので1号土坑とする。1号土坑の最下面からは須恵器片が出土しており、古墳時代かそれより新しい時期の遺構と考えられる。

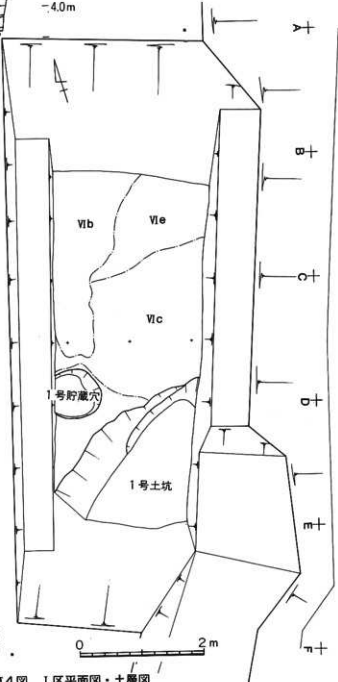
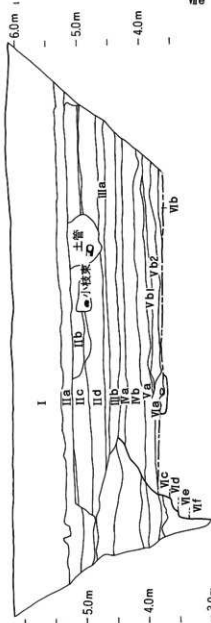
次に検出したのは1号貯蔵穴である。これはⅥa層を剥ぎ取った段階で出現し、埋土中に堅果類が少量含まれていた(第5章参照)。平面形は円形で、南北80cm、東西75cm±α、深さは最大10cmであり本来はもっと深かったものが、上部が自然に削りとられたのであろう。



第3図 調査区配置図



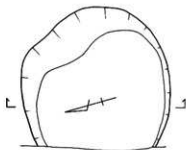
- I : 客土、米倉バイパス建設時。
- IIa : 7.5YR4/2 灰褐。旧表土。
- IIb : 7.5YR3/3 暗褐。土層。
- IIc : 10YR3/3 暗褐。土層。
- IIId : 10YR3/1 黒褐。土層。
- IIIa : 7.5YR4/1 褐状。土層。
- IIIb : 10YR3/1 黒褐。土層。
- IIIc : 10YR3/2 灰黄褐。土層。
- IVa : 10YR3/1 黒褐。土層。
- IVb : 10YR3/1 黒褐。土層。
- Va : 5Y3/1 オリーブ風。土層。
- Vb1 : 2.5YR5/1 赤灰。細砂層。
- Vb2 : 2.5Y4/1 赤灰。土層。
- VIa : 10YR3/1 黒褐。砂層。
- VIb : 7.5Y6/3 オリーブ黄。砂層。
- VIc : 10Y7/1 灰白。細砂質土。
- VIe : 7.5YR7/1 明褐色。赤灰色系もみ土層。
- VIe : 7.5YR2/2 黒褐。植物残体多量層。
- VIe : 7.5YR5/1 褐状。砂質土。
- VIe : 7.5Y6/3 オリーブ黄。砂層。
- VIe : 7.5Y7/3 浅黄。砂層。
- VIe : 10YR2/1 黒。粘土層。
- VIe : 7.5Y6/3 オリーブ黄。植物残体多量層。



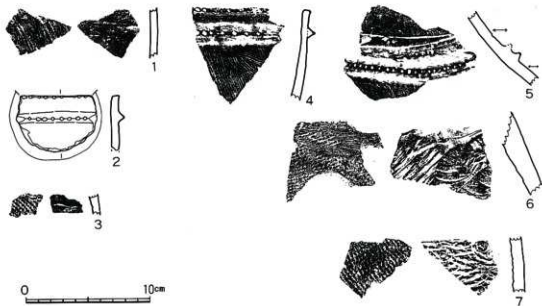
第4図 I区平面図・土層図

### I 区の土器 (第6図)

特徴的なもの7点を図示した。1は外面に巻貝条痕をもつ縄文式土器。2は下城式甕の口縁部破片を再加工したもので、口唇部はそのまま残し、他の縁辺部を打ち欠いて半円形に仕上げている。3は貯蔵穴出土の唯一の土器で、縄文時代後期中葉頃のものである。4～7は1号土坑から出土したものである。4は外面の刻目は刷毛具による同時施文で、突帯より上はヨコナデ、内面はナデ調整。5は壺の肩部で、突帯より上に2本のヘラ描き沈線をもつ。外面は横方向を中心とした磨き調整。内面の調整は不詳。6・7は最下部から出土したもので、須恵器の甕である。



第5図 1号貯蔵穴実測図 (1/30)



第6図 I区出土遺物実測図

### 3. II 区 の 調 査

重機により地表下約1.6 mまで掘り下げた後手掘り作業を行った。調査の結果、縄文時代の堆積層に掘り込まれた遺構を検出した。

#### 層序 (第7図)

II区の特レンチ内の層序を8層に大別した。1層は、2、3年前の客土である。

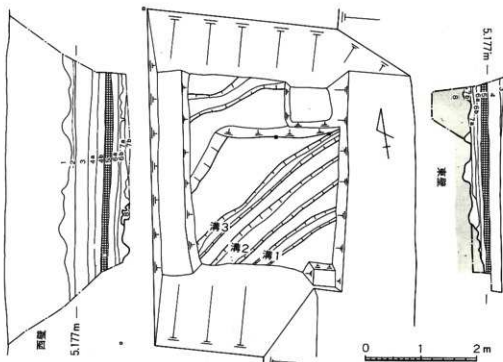
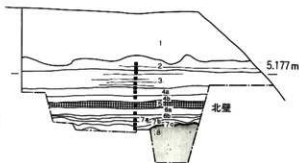
2層は現在の水田耕作土である。水田床土は2枚認められる。

3層は厚さが約30cmあり、厚さ2cm前後の赤褐色の酸化鉄が沈殿した床土が5枚存在する。

4層は褐灰色の厚さ約30cmの土層で、上(a)、下(b)に細分する。4b層は固く、乾くと白っぽくなり、4a層の水田床土の可能性もある。4層からは6世紀代の須恵器が出土している。

5層は厚さ約10cmで赤褐色の酸化鉄が沈着し、水田床土と考えられる。弥生時代中期の土器が出土

- 1 客土
  - 2 旧表土 暗灰黄色(Hue2.5Y5/2)
  - 3 水田床 赤褐色(Hue5Yr 4/6)旧水田床が5枚観察される。(Hue5YR4/6)
  - 4 旧表土 暗褐色 4a褐灰色(7.5YR4/1)  
4b褐灰色(7.5YR5/1)乾くと白っぽくなる。
  - 5 水田床 赤褐色
  - 6 旧表土 6a暗赤灰色(2.5YR3/1)  
6b暗灰色(N3/0)白い粒子を含む。
  - 7 a 水田床 褐灰色(10YR4/1)硬い。  
b 水田床 褐灰色(10YR4/1)層に赤褐色(5YR4/6)の酸化鉄が沈着する。
  - 8 風化土 褐灰色(7.5YR4/1)浅い凹地に堆積している。
  - c シルト 青灰色
- はプラントオパール採取地点。



第7図 II区 平面図・土層図

している。

6層は厚さ約15cmの土層で、厚さ1cmほどの床土面を境に6a層と6b層に細分する。6a層は暗赤灰色、6b層は暗灰色である。

7層は厚さ20cm前後の土層で、7a・7b・7c層に細分する。7a・7b層には酸化鉄が沈着していて、7b層は基盤の8層に掘り込まれた遺構の埋土である。7c層は8層の風化土層。

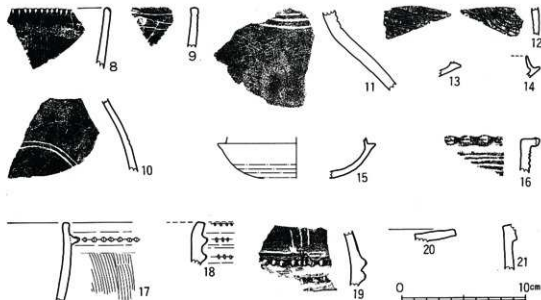
#### 水田関連遺構（第7図）

7b層上面において、南西～北東に走る3条の溝を検出した。トレンチ南東隅には8層が盛り上がっているが、7b層上面近くまで掘り過ぎている。Ⅲ区の土層図に、Ⅱ区の水路側壁面図が示されている通りである。溝と溝の間の高まりは盛土されたものではなく、基盤層が掘り残されたものである。溝は約20cmの間隔を置いて平行に走り、底面高は溝1が高く、溝2、溝3と続く。溝3の北側は掘り過ぎ部分があるが、ほぼ平坦な面を検出した。7b層で検出した遺構の性格は、平坦面是水田址と考えられ、溝もそれに関連するものであろうか。

プラントオパール分析のため土壌を、北壁面と溝3の埋土、溝3の北の平坦面の埋土で採取した。

#### Ⅱ区の土器（第8図8～21）

8は直線的に延びる甕の口縁部で、口唇部外側に刻目をもつ。弥生前期後葉。9は外面に3本の沈線をもつ、縄文晩期と思われるもの。10・11は壺で、弥生前～中期。12～15は須恵器で、6世紀後葉～末頃のもの。16はヘラ描き沈線を描く瀬戸内系甕で、弥生前期末。16・17は下城式甕、19は3本の沈線文を描き、刻目突帯が2条接する壺、20・21は甕である。8・9・11～14は4層、10・15は4層～5層、16は5層、17～21は7b層から出土した。後述するように、7b層は弥生中期前葉に形成されたものと考えられる。



第8図 Ⅱ区出土遺物実測図



#### 4. III 区 の 調 査

##### (1). 調査区について

工事によって掘られた水路は上面幅約12m、下底幅約6mである。木器・流木等の出土する包含層の状況を確認するため、両側の壁面を削って観察したところ、幅9mほどの溝状の遺構が認められ、木器等はこれに含まれていることが分った。そこで発掘調査の対象を西壁の溝中心部に決め、幅5mで旧表土から垂直に掘り下げることにした。調査の進行に伴い上層から層別に遺物を採り上げ、1～13層に分層した。

##### (2). 層 序 (第9図)

Ⅲ区の層序は、大別して4つに区分することができる。まず、2、3年前に整地した際の客土である1層、現在の耕作土及び水田耕作と関連する2～7層、溝状遺構内の埋土である8～13層、そして溝状遺構の地山である縄文時代の沖積層である。Ⅲ区では発掘を行った巾5mの範囲には独自の層名をつけたが、トレンチの外側についてはⅡ区の層名を使う（〔 〕内がⅡ区の層名）。

2層は、1986年頃までの水田耕作土である。

3層は2層の水田床土である。3層下部と4層の層理面も水田床土である。3～5層は南側では不明瞭となり、Ⅱ区の3層に相当する層となる。3層から近世の唐津焼、3～4層からは中世の瓦質土器が出土している。

6層は灰色土層で、中間の薄い水田床土を挟んで上下に区分できるが、発掘区付近では不明瞭である。

7層は酸化鉄が沈着し赤化した上部と、乾くと灰色に変わりクラックが入る下部に区分できる。特に上部は赤化しているため、木遺跡のどこでも容易に見分けられる。

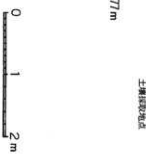
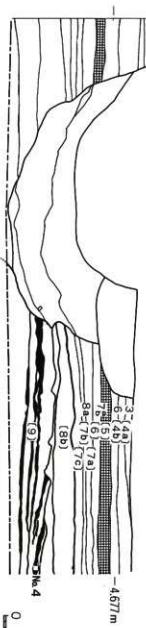
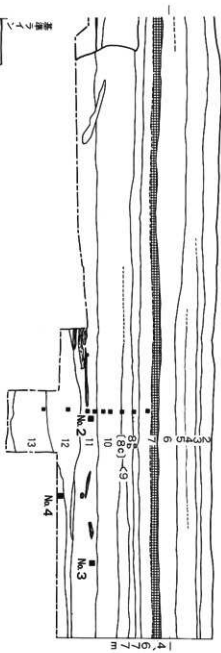
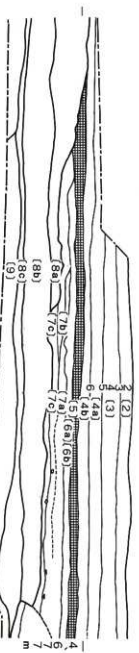
8層も上下2枚に区分でき。下位の8b層からは溝状遺構内の堆積物となる。8a層と8b層の上面はそれぞれ水田床土を形成している。

9層は黄色の斑点を多量に包含する特徴がある。この層からは弥生式土器が出土している。

10層になると水分と粘度が増す。弥生式土器が出土する。

11～13層になるとさらに水分と粘度が増えてくる。11層は木遺跡で最も多量の遺物が出土した層で、木器類が密集して出土した。12～13層でも少量の木器類が出土し、12層では少量の貝が分布し、13層では混貝土層をなす部分がみられた。

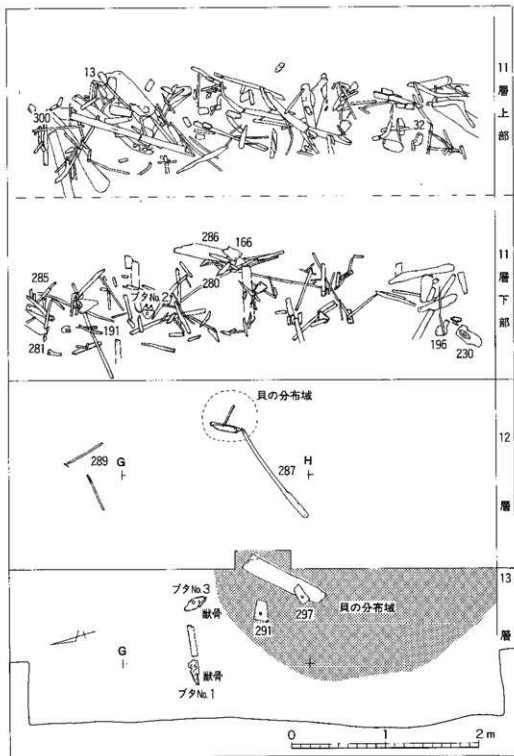
なお、Ⅲ区では縄文時代の堆積層の年代を求めるため、トレンチ北側の壁面からC14年代測定用の植物遺体を採取したほか、植物遺体分析、花粉分析、プラントオパール分析のための土壌を採取した。採取地点は第9図に示す通りである。



第9図 III区土層図

- (1) 1 表土 暗灰褐色(2.5Y5/2)
- (2) 2 田壌土 暗灰褐色(2.5Y5/2)
- (3) 3 水田床 赤褐色(5YR4/6)
- (4a) 6 田壌土 暗灰褐色(7.5YR4/1~5/1)
- (4b) 6 田壌土 暗灰褐色(2.5YR4/1)
- (5) 7 水田床～田壌土 暗赤灰色(2.5YR4/1)
- (6a) 7a 水田床
- (6b) 7b 水田床
- (7a) 8a 溝内堆積物 最上部の底入土
- (7b) 9 溝内堆積物 黒色(5Y6/8)黄褐色を多量に含む土
- (7c) 10 溝内堆積物 黄褐色(10YR2/1)粘質土
- (8a) 11 溝内堆積物 黒色(7.5YR2/1)粘質土
- (8b) 12 溝内堆積物 黒色(N2.0)粗砂を基調に粘質土
- (8c) 13 溝内堆積物 黒色(7.5YR2/1)粘質土
- (9) 水田床 暗灰色(10YR2/1)壤土
- (10) 水田床 暗灰色(N2.0)
- (11) 水田床 暗灰色(7.5YR4/1)
- (12) シルト
- (13) シルト 灰白色(10Y7/1)
- クマシナ オリーブ黒色(7.5YR2/2)の粘厚層と  
明黄褐色(2.5Y6/6)の砂層からなる  
クマシナ

■( )内はIII区の層の名  
■は土層力等々のラット・システム採集地の地  
No.1~No.4は、No.2~No.4は植物遺体分析用の  
土層採取地



第10図 Ⅲ区11～13層遺物出土状況実測図(木製品の番号は採上げ時のもの)

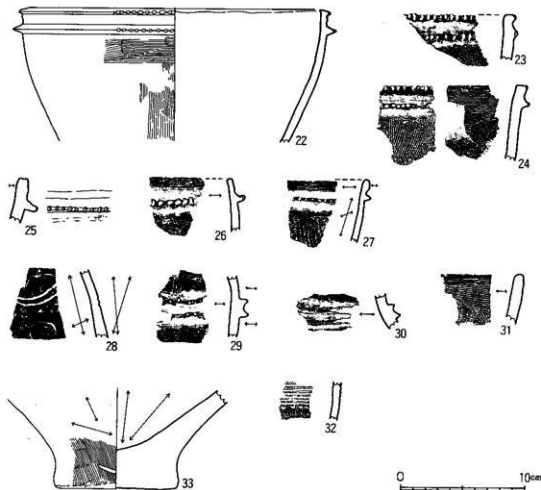
### (3) 土器

#### 13層の土器 (第11図22~33)

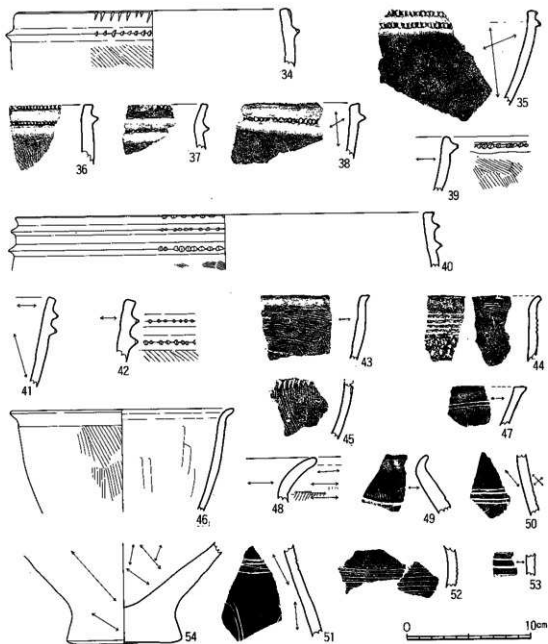
22~27は下城式甕、28~30・33は壺、32は瀬戸内系の甕、31も甕であり、在地系土器を主体に周辺地域の土器が混じる様相は13~11層に共通するものである。

22は内面はナデで平滑に仕上げられ、外面は縦方向の刷毛調整の後、上部を別の刷毛具で横ナデしている。最大径26.1cm。23の内面は部分的に磨かれている。2列の刻目のうち上のは下の刻目に対応する刻みによって切られており、上の刻目を施した後に下の刻目をつけたことを示している。28の施文が2本単位で沈線かどうか不明。29は断面M字形の突帯に刻日がつき、上位に沈線が3本走る。32は内面磨き、外面にはヘラ描き沈線と刺突列がある。

12層の土器 (第12図34~53) 34~42の下城式甕と49~53の壺は在地系で、46は北部九州系甕、44・45は瀬戸内系甕である。43は在地系甕か。下城式のうち、34・40には磨き調整がない。44の外面は剝落気味だが、5本のヘラ描き沈線があり、下位に列点文をもつ。44・45も磨きが認められない。



第11図 Ⅲ区13層出土遺物実測図



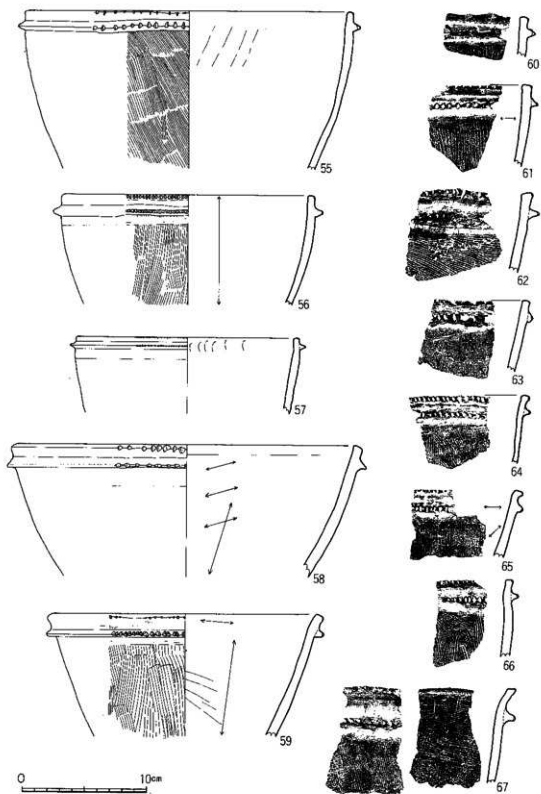
第12図 III区12層出土遺物実測図

46は内面ヘラナデ、外面は口縁部を指ナデして凹んでいる。

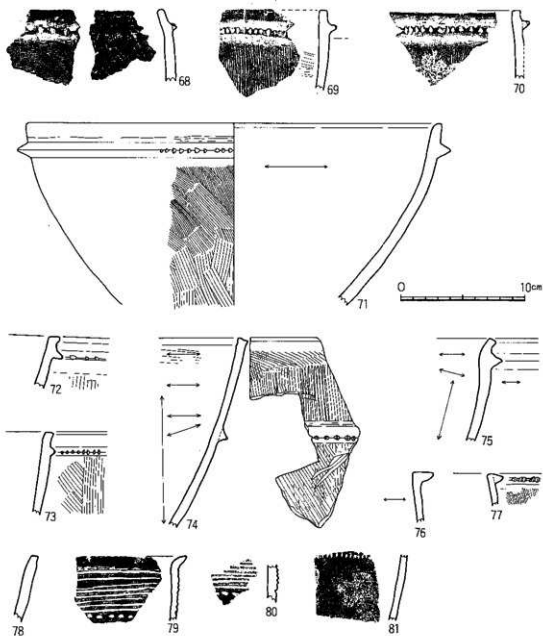
11層の土器（第13～16図 55～103）

11層の遺物の出土量は、本遺跡の中で最大である。土器の地域色は基本的に下層と変わらない。下城式甕には、口縁部下位に2条の突帯をもつものは図示しなかった分を含めて存在しない。

68は口縁部が強く内湾し、突帯に比べて大きな刻目があり、その下に横刷毛が施されており下城式甕の中では異質の感じがする。76は逆L字口縁の甕、77は断面三角形の突帯に刻目をもつ。79～81は

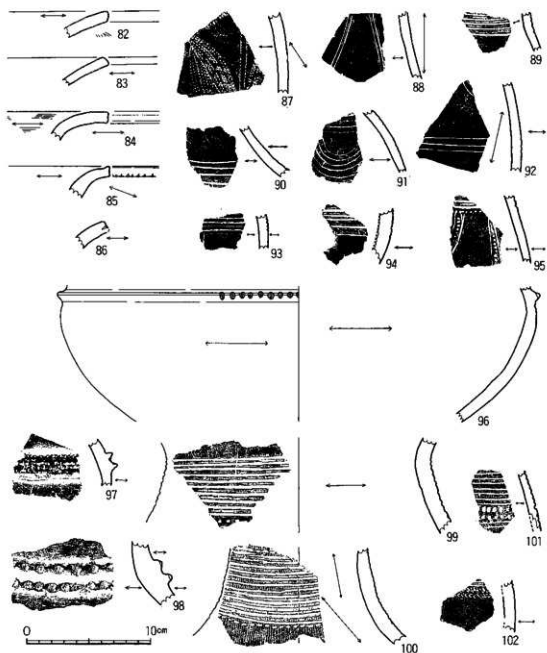


第13图 III区11层出土器物实测图



第14図 III区11層出土遺物実測図

瀬戸内系甕で、79には8条のヘラ描き沈線と列点文がある。80も同様で、81の外面には部分的な磨き  
が認められる。82~102は壺である。87は二枚貝による有軸木葉文をもつ。88~95は沈線による弧文  
・平行線文をもち、95には刺突が加わる。2本単位の沈線をもつもの(88・91・93・95)と1本毎の  
施文であることの明らかなもの(94)などがある。97は断面M字突帯の稜上を刻み、谷部に円形刺突  
をもつ。98は刻目に布の正痕を利用している。99~100は外面は刷毛調整(99はナデが加わる)、内  
面は良好な磨きを施す。

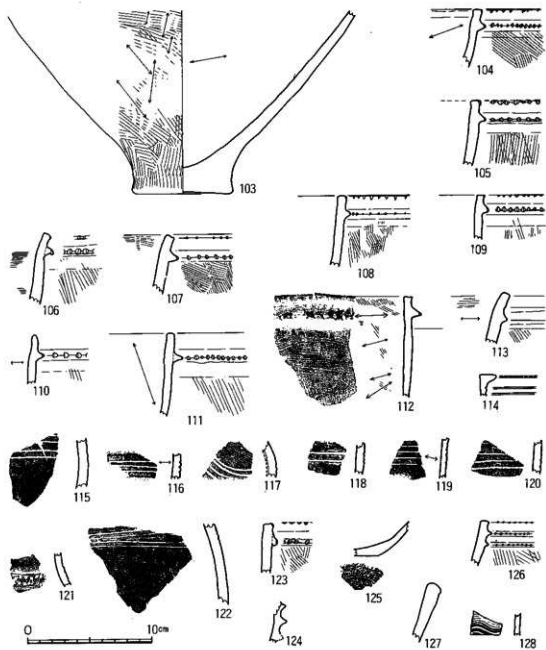


第15図 III区11層出土遺物実測図

10～3層の土器（第16図104～128）

104～122は10層から出土した。壺はすべて2本単位で描かれている。121は削出し突帯をもつ壺である。123・124は9層出土。124は断面三角形の突帯をもつ壺の胴部である。125は6層出土で、底部へら切りと思える土師器の坏であり、中世のもの。126は5層出土。127は3～4層出土の瓦質土器。128は3層出土の唐津焼である。



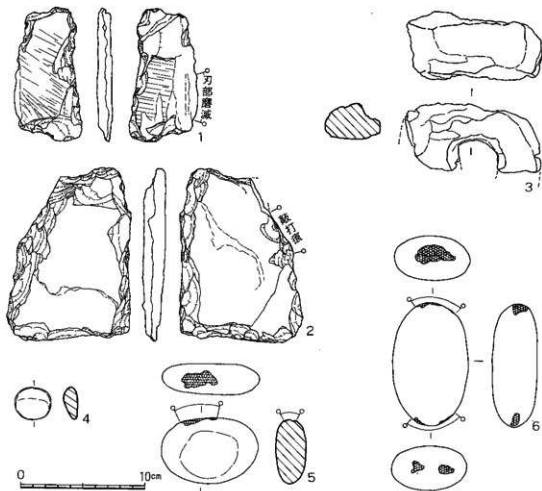


第16图 III区11~3層出土遺物実測図

(4) 石器・石製品 (第17図1~6)

すべて11層から出土したものである。1は緑泥片岩を用いた石斧で、両面の一部を磨いている。長さ10.7cm、幅5.5cm、厚さ1.3cm、重さ85g。2は打製石斧で、節理面で割れて板状になる緑泥片岩(?)を利用している。長さ13.9cm・幅10.0cm・厚さ1.9cm・重さ338g。3は軽石を加工したもので、ドーナツ状をなすものが半分に割れた形をしている。孔部は磨かれているが、他は形を整えた程度である。長さ10.5cm以上・厚さ5.5cm。4は蛇紋岩の円礫である。全面がつるつるしており、長さ3.0cm・幅2.6cm・厚さ1.2cm・重さ13gである。5は安山岩の叩石で、1ヶ所に敲打痕がある。長さ7.9cm・幅5.0cm・厚さ2.5cm・重さ143g。6も安山岩製の叩石である。長軸の両端に敲打痕があり、長さ9.9cm・幅6.2cm・厚さ3.6cm・重さ280g。この他、11層からは姫島産黒曜石を用いた剥片が2点出土している。

なお、調査前に両端を欠損した縄文系の磨製石斧が採集されているが、これまで大陸系磨製石器は発見されていない。



第17図 Ⅲ区出土石器・石製品実測図

## (5) 木器 (第18~24図)

下部桑苗遺跡からは調査面積 15㎡の中から約 300点に近い木器、流木等が出土している。

出土木器はⅢ区の11~13層であるが、その大部分は11層からで、農具、工具、紡織具、容器、武器等の各用途の木製品が、丸太材、板材等に混入する。また、11層で、ヤマザクラの原木を加工し、中央部に穿孔したのち、表面全体に赤色顔料を塗布したものが出土しており、用途の限定は困難であるが、祭祀的意味をもつ遺物として注目される。

12層になると木器、木材の出土は急に稀薄となり、櫛状木製品等数点のみである。13層も同様であるが、ここからは平鍔 2点が出土している。

これから各層から出土した木器の大部分は破損品であり、廃棄されたものであることが考えられる。

なお、図版に掲載した木器の中には、大分市歴史資料館保管のものが多く、これは、発掘区からの個人的な採集によるものであるが、優品が多い割に、層位、出土状態等一切不明であり、残念でならない。

## 鍔 (第18・19図 1~9)

出土した鍔類は、いわゆる諸手鍔、丸鍔、二又鍔、三又鍔等は一切なく、全て平鍔の範疇に入るものだけである。出土した平鍔は、柄つば部の形態から、柄つばに明瞭な隆起をもないもの(1~8)と突出する舟状の隆起をもつものに分類できる。このうち舟状隆起をもつ平鍔の未製品(第図45)も採取されているが、これも製作過程で欠損し、廃棄された可能性の強いものである。

1は長さ30.4cm・幅15.8cm・身厚2.3cmを測り、全体的に長方形をなすが、刃先に近い程その身幅が狭少になる傾向をもつ。柄つばはやや隆起し、円孔を穿つ。両側縁及び刃部、基部をやや薄く削り込んでいるため、横断面は三角形状を呈している。

2は長さ24.2cm・幅18.6cm・身厚2.5cmと1よりもさらに身厚に造られている。柄つば付近の隆起はほとんど無く、方形孔を穿つただけである。基部から刃部にかけて次第に薄くなる縦断面をもつ。

1、2とも刃先は特に鋭利に削り出されておらず鈍い。

3は半折品である。長さ27cm・幅約19cm・身厚2cmで刃先になる程薄くなるのは1、2と同様であるが、刃先が鋭利であることや若干であるが、内面に反りをもつ点で異なる。柄つば部の隆起は不明瞭で、円孔を穿つ。

4、5は残存状態が悪く、刃先等の形状は不明瞭であるが、4は柄つば部が身厚に造られ、身と柄とが直角になるように円孔が穿たれており、諸手鍔の可能性もある。

6は長さ26cm・幅約19cm・身厚1.8cmで、柄つば付近は剥落するが、顕著な隆起は無く、若干身薄になり刃先に至る。方形孔を穿つ。

7は刃先のみが残存であるが柄つば部から刃先にかけて急速に狭少になる形態をもつ。

8は厚さ2.4cmと身厚に造られるが、長さ23cm・基部幅約14cmと小ぶりであり、身の中央から切り込みが入り、刃先で幅約7.6cmと、基部の半分近くまで幅狭になる形態を有する。柄つば部の隆起は特に無く、円孔を穿っている。

9は本遺跡出土の唯一舟形隆起をもつ完成品で、内面割落のために身厚、全形の復元は困難である。身の中央部の両側縁に切り込みの入る8と類似するタイプと考えられるが、8に比べると、切り込みで幅狭になったものが、刃先でまた幅広になる傾向が見られる。円孔を穿つ。

#### 柄棒（第18図10～12）

いずれも自然木（枝木）を断面が円形になるように加工したもので、径の太い方の端部は円く仕上げられている。

#### 柱状片刃石斧柄（第20図13）

自然木の枝分れ部を利用して、石斧装着部としたもので、石斧装着部と柄部はT字形をなしている。装着部は上面を細かい削りにより平坦に仕上げ、石斧挿入部は長さ6.4cm・幅2.2cm・深さ2.3cmの溝を掘り込み、さらに装着部先端付近には、石斧緊縛用の紐がかり溝を有している。石斧装着部と柄とは約55°鋭角を呈するが、装着された石斧と柄とは約45°になる。柄部は断面楕円形状に仕上げられている。なお、当遺跡から柱状片刃石斧を採集したとの情報もあるが実見していない。

#### 用途不明木製品（第20図14～19）

14は有頭棒の半截品で、長さ約11cmで断面は長楕円形を呈する。15は非常に薄く扁平に加工された板材で、幅2.4cm・厚さ0.4cm・長さ不明。16は長さ18.6cm、中央部幅3.6cmで両端が幅狭に仕上げられている。17は一方が方柱状に他方が有頭状に仕上げられたもので、中央部は径1.6cmの円柱状を呈する。全長23.2cm。18は有頭部付近の残存であるが、残存部長約6cm・幅約1cmと非常に小型の木製品である。当品は有頭状整形のち全体を磨いている。19も18に類似した有頭木器であるが、残存部長約17cmと18の3倍以上の大きさである。円錐形状に造られた有頭部の片方は平坦に仕上げられており、他部は径2.4cmの円柱状を呈する。

#### 用途不明木製品（第20図20）

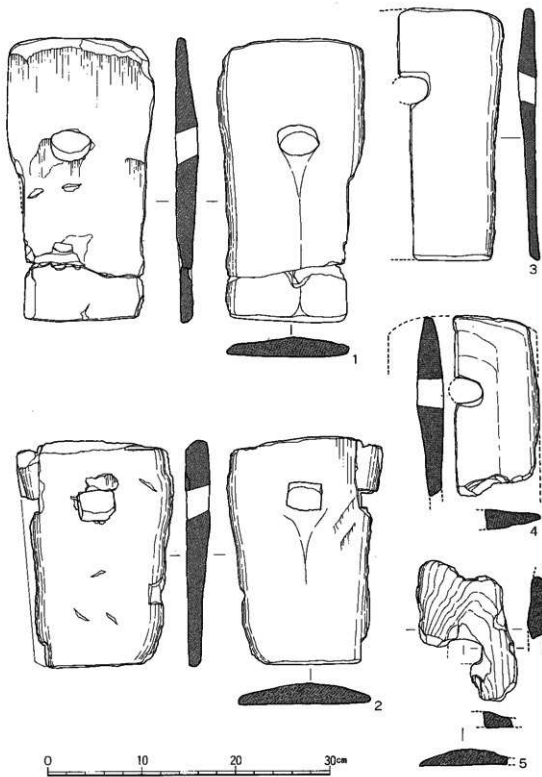
20は節状の部分を造り出すなど、一見竹を利用した製品と考えられるが、材質はヤマザクラで全長16cm・幅6.2cmで表面全体に赤色顔料を塗布している。その後、製品中央のやや下位に孔を穿っている。

#### 弓（第20図21）

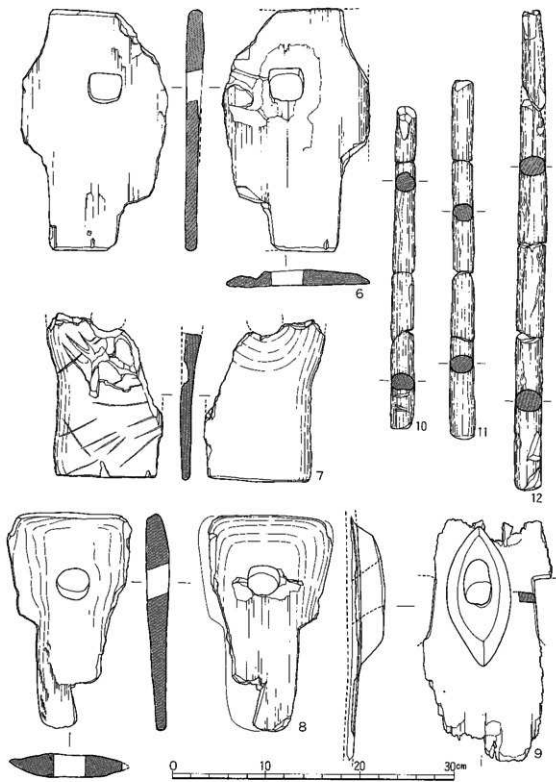
丸木弓と呼ばれるもので、「く」の字状の自然木の枝の両端に弦を削り出したもので、本品の片弦は欠損している。また本体両弦に近い部分は整形を目的とした削りが実施されている。復元長約95cm長弓の部類に入る。

#### 有柄木製品（權状木製品第20図22）

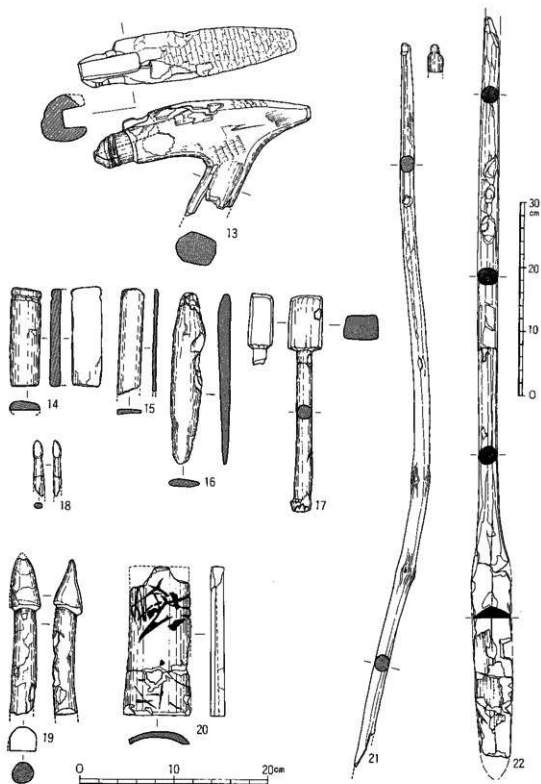
身部先端及び柄部末端部が欠損するが、現存部から120cm以上が推定できる。頭部長約40cm、幅6cmで、中央に稜をもち、両側縁に刃部を造り出しており、身部断面三角形を呈する。柄部は径3cmの棒状に削り出している。柄部から身部へは緩やかな広がりをもせ、先端部はやや細狭となる剣状を呈すると考えられる。身部中央片端部に「コ」の字状の挟りを有するが意味不明。用途については、その形状から權あるいは、国東町安国寺遺跡出土例のような「フクシ」状木製品と考えられる。



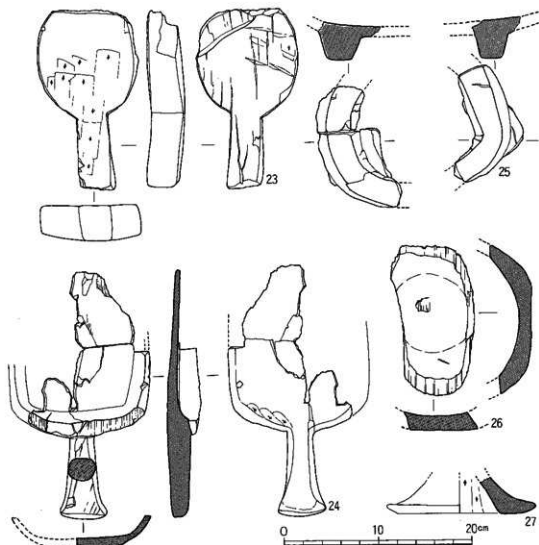
第18図 下都桑苗遺跡出土木器1 (木楸類)



第19回 下郡桑苗遺跡出土木器2 (木器・木柄類)



第20图 下郡桑苗遺跡出土木器3 (石斧柄類・弓類)



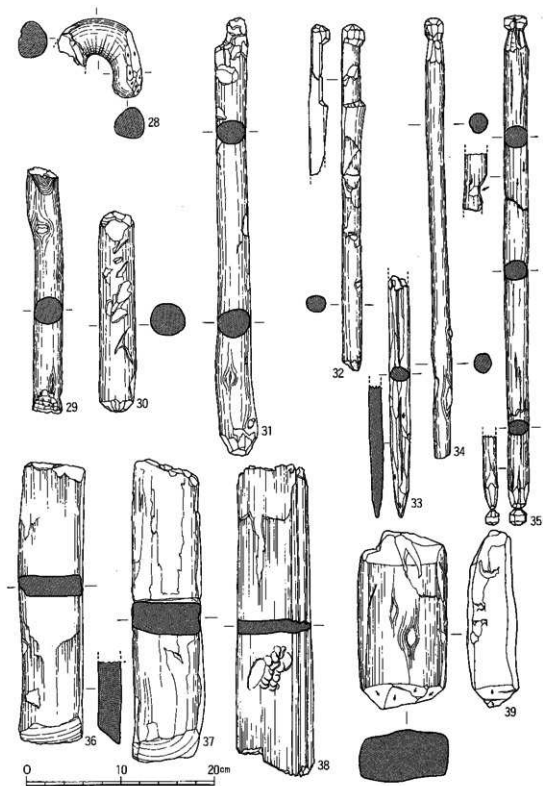
第21図 下郡桑苗遺跡出土木器4 (容器類)

容器類 (第21図23~27)

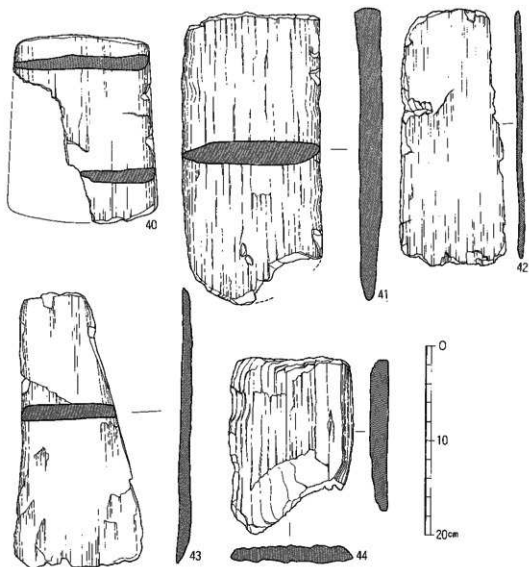
23は把手付容器(杓子形木製品)の未製品で、断面を見ると中央が歪曲して造られており、身と柄との有効角度を意識したものと考えられる。全長19cmで、身部は長さ11.4cm・幅10.8cmとほぼ円形を呈する。

24はちりとり形の身に削り出しによる末端部をやや太めにした棒状の柄のついた、民具の「もみすくい」に類似した木製品である。身の先端部は欠失しているが、先端部を次第に薄くすることにより、すくい取り易くしている。先端部以外の残り三方は縁を残す。本品の同例は東大阪市鬼鹿川遺跡<sup>(図1)</sup>でも確認できる。25はいわゆる脚付盤状木製品と考えられる脚部のみが残存品である。脚部2片は同一個体と見られるが、片方が円形、他方が隅丸方形形状を呈している。脚形状が不定形であることから、径を復元することは困難で、円形に近い脚部だけで見ると脚底部外側径約20cmが想定できる。26は碗





第22図 下郡桑苗遺跡出土木器5 (紡織具?ほか)



第23図 下郡桑苗遺跡出土木器6

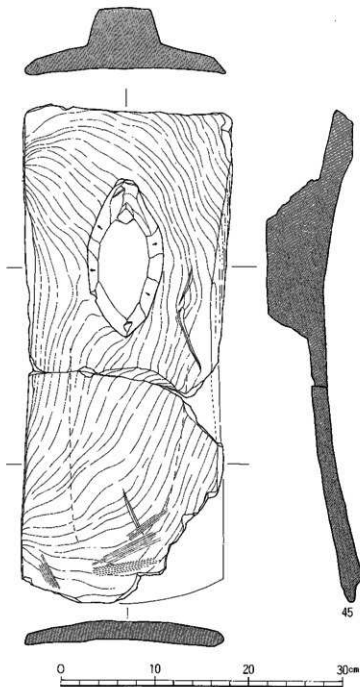
状の粗製容器の底部、27は高杯の脚部。

**不明丸木材（第22図28～31）**

28は径3.8cmの自然木の湾曲部の一部に加工を施したもので、把手状を呈する。29～31は自然木の片端あるいは両端に杭状の切り込みを入れただけのものである。33は全面削り込んだ杭状木器。

**有頭木製品（第22図32・34・35）**

32は「ちまき」と呼ばれる布巻筒あるいは糸巻具に類似するが、普通「ちまき」は棒状材の両端部の片面に瘤状部を削り出すものであるが、本品では片方のみに瘤状部が残り、他方は杭状に削られ、焦げているため、用途限定には若干疑問が残る。34、35は有頭棒である。35は両端に有頭部があり、



第24図 下郡桑苗遺跡出土木器7（鋸未製品）

このことから「ちきり」と呼ばれる紡織具の一種に類似するものである。

その他板材等（第22図36～38第23図40～44）

これは板状に加工された木材で、36、37には片端部は鋭利に切り込まれている。当遺跡では、これら板状品は、大小、量的にも多く出土している。40～44は板材であるが、40、41等は端部の整形が実施されていることから、平鍛の未製品とも考えられるものである。44は焼材。

広楸（櫛）未製品（第24図45）

中位より欠損し、製作途中で廃棄されたものと考えられる。平面的には頭部付近に舟形隆起を造り出し、刃部に整形加工を施している。ほぼ長方形を呈するが、中央部で若干くびれる。断面は湾曲し、頭部（基部）は他に比べ厚い。これらは<sup>(2)</sup>下神田遺跡、<sup>(3)</sup>里田原遺跡で出土した未製品と共通した特徴を持っている。

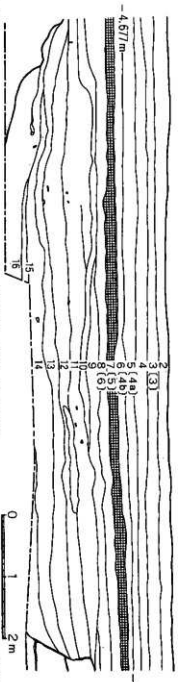
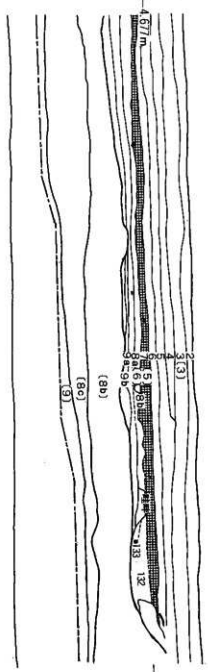
註1 「鬼虎川の木質遺物」—第7次発掘調査報告書第4冊—財団法人東大阪市文化財協会 1987

註2 「下神田遺跡」行橋市教育委員会 1985

註3 「里田原遺跡」長崎県教育委員会 1975

表1 下部桑苗遺跡出土木器一覧表

| No. | 旧No. | 図版   | 法 量 cm |         |                       |     |     | 柄孔 | 樹種 | 木取り | 備 考            |
|-----|------|------|--------|---------|-----------------------|-----|-----|----|----|-----|----------------|
|     |      |      | 全 長    | 莖部巾     | 刃部巾                   | 基部厚 | 刃部厚 |    |    |     |                |
| 1   | 297  | 第18回 | 30.4   | 15.0    | 12.8                  | 1.0 | 1.2 | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・ほぼ完成形・13層   |
| 2   | 291  | "    | 24.4   | 16.0    | 13.0                  | 2.4 | 1.4 | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・ほぼ完成形・13層   |
| 3   | "    | "    | 27.0   | (20.0)  | (16.4)                | 1.1 | 1.0 | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・半折品・大分市歴保管  |
| 4   | "    | "    | 19.0+α | (16.0)  | ---                   | 1.0 | --- | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・刃部欠損・大分市歴保管 |
| 5   | "    | "    | ---    | ---     | ---                   | --- | --- | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・大分市歴保管      |
| 6   | "    | 第19回 | 24.8   | ---     | ---                   | 1.5 | 1.2 | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・大分市歴保管      |
| 7   | 166  | "    | ---    | ---     | 11.0                  | --- | 1.0 | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・11層下        |
| 8   | "    | "    |        |         |                       |     |     | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・大分市歴保管      |
| 9   | 230  | "    |        |         |                       |     |     | 楕円 | カシ | 椀目  | 平嵌・舟形隆起・11層下   |
| No. | 旧No. | 図版   | 樹種     | 木 取 り   | 備 考                   |     |     |    |    |     |                |
| 10  | 27   | 第19回 | ヤマグワ   | 芯持ち丸木   | 柄棒・全長34.6cm+α・11層上    |     |     |    |    |     |                |
| 11  | 13   | "    | カシノキ   | 芯持ち丸木   | 柄棒・全長38.4cm+α・11層上    |     |     |    |    |     |                |
| 12  | "    | "    | ?      | 芯持ち丸木   | 柄棒・全長52cm+α 大分市歴保管    |     |     |    |    |     |                |
| 13  | 286  | 第20回 | コナラ    | 芯持ち(枝木) | 斧頭(柱状片刃石斧)・11層下       |     |     |    |    |     |                |
| 14  | ?    | "    | ?      |         | 有頭木製品・片截品             |     |     |    |    |     |                |
| 15  | 224  | "    | ?      |         | 板状品                   |     |     |    |    |     |                |
| 16  | 280  | "    | アカガシ   |         | 用途不明木製品               |     |     |    |    |     |                |
| 17  | 191  | "    | カシノキ   |         | 用途不明木製品・11層下          |     |     |    |    |     |                |
| 18  | 288  | "    | サカキ    |         | 用途不明有頭木製品・11層下        |     |     |    |    |     |                |
| 19  | 281  | "    | カシノキ   |         | 用途不明有頭木製品・11層下        |     |     |    |    |     |                |
| 20  | ?    | "    | ヤマヅクラ  |         | 用途不明製品・表面赤色顔料塗布・11層下  |     |     |    |    |     |                |
| 21  | "    | "    | ?      | 芯持ち丸木   | 弓(丸木弓)・片刃欠失 大分市歴保管    |     |     |    |    |     |                |
| 22  | 287  | "    | ?      |         | 有柄木製品(楕状木製品)・12層      |     |     |    |    |     |                |
| 23  | 196  | 第21回 | ?      |         | 有柄木製品(杓形木器木製品)・11層下   |     |     |    |    |     |                |
| 24  | "    | "    | ?      | 板 目     | 有柄木製品(民具もみすくい) 大分市歴保管 |     |     |    |    |     |                |
| 25  | "    | "    | ?      | 板 目     | 脚付楕状木製品・うるし塗? 大分市歴保管  |     |     |    |    |     |                |
| 26  | "    | "    | ?      | 板 目     | 碗状粗製容器底部・11層上 大分市歴保管  |     |     |    |    |     |                |
| 27  | "    | "    | ヤマグワ   | ?       | 高杯脚部 大分市歴保管           |     |     |    |    |     |                |
| 28  | 290  | 第22回 | ヤブニツバ  | 芯持ち材    | 用途不明丸木材               |     |     |    |    |     |                |
| 29  | 210  | "    | 不 明    | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 30  | 197  | "    | ?      | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 31  | 279  | "    | サカキ    | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 32  | 285  | "    | ?      | "       | 有頭木製品(ちまき?)・11層下      |     |     |    |    |     |                |
| 33  | 4    | "    | イヌガヤ   | "       | 梳状木製品                 |     |     |    |    |     |                |
| 34  | 289  | "    | サカキ    | "       | 有頭木製品(ちまり?)・12層       |     |     |    |    |     |                |
| 35  | 300  | "    | ?      | "       | 有頭木製品(ちまり?)・11層上      |     |     |    |    |     |                |
| 36  | 147  | "    | アカガシ   | 板 目     | 板材                    |     |     |    |    |     |                |
| 37  | 94   | "    | アカガシ   | 板 目     | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 38  | 295  | "    | ス ギ    | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 39  | 38   | "    | ?      | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 40  | "    | 第23回 | シイ?    | 椀 目     | " 大分市歴保管              |     |     |    |    |     |                |
| 41  | "    | "    | シイ?    | 椀 目     | " 大分市歴保管              |     |     |    |    |     |                |
| 42  | 163  | "    | コナラ    | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 43  | 283  | "    | トチノキ   | "       | "                     |     |     |    |    |     |                |
| 44  | 189  | "    | ス ギ    | "       | "・焼材                  |     |     |    |    |     |                |
| 45  | "    | 第24回 | カシ     | 椀 目     | 平嵌木製品・舟形隆起 大分市歴保管     |     |     |    |    |     |                |



- 1 寄土 暗灰褐色(Hue2.5Y5/2)
- 2 田妻土 赤褐色(Hue5YR4/6)
- (3) 3 水田床 暗灰色
- 4 田妻土 暗灰色(7.5YR4/1)
- 4a 田妻土 暗灰色(7.5YR5/1)粒くと白っぽくなる。
- 4b 水田床 赤褐色
- (5) 7 水田床 赤褐色
- (6) 8a 田妻土 a暗灰色(2.5YR3/1)、暗灰色(N3/0)
- 9 水田床 赤褐色

- 10 溝内堆積土 黄灰色 黄色粒を含む土
- 11 溝内堆積土 暗褐色 粘土
- 12 溝内堆積土 暗褐色 粘土
- 13 溝内堆積土 暗褐色 粘土
- 14 溝内堆積土 灰色 砂層
- 15 溝内堆積土 灰色 砂層
- 16 溝内堆積土 暗褐色 泥炭

- 8b 水田床 暗灰色(10YR3/1)硬い
- 9 水田床 暗灰色(N3/0)
- 10 風化土 暗灰色(7.5YR4/1)
- (8b) シェルト 黄灰色 粘炭
- (8c) シェルト 暗褐色 泥炭
- (9) シェルト 灰色

※( )内はI区の前番号

第25図 IV区土層図

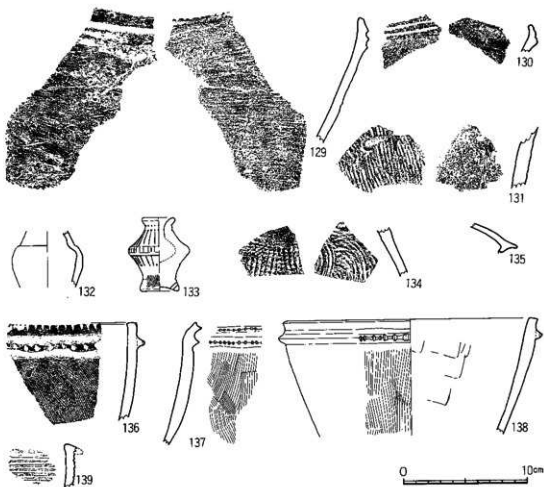
※132, 133(宅形)小型の富士土地点

## 5. IV区の調査

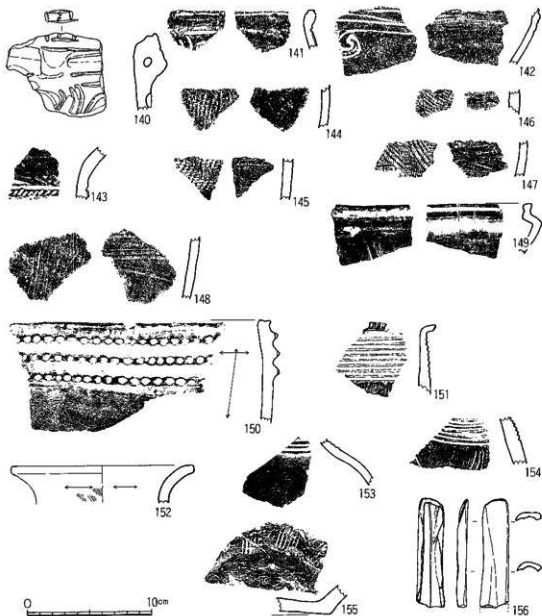
### (1) 層序 (第25回)

水路の右岸をIV区とした。基本的な地層の堆積は、他の地区とはほぼ同様である。つまり、1986年以降の整地層である1層、水田耕作に関連する2層から9層までの層、河川堆積に関連する(8)層以下の堆積、その河川堆積土を掘削した溝流入土に区分できる。

1層は客土で1mの厚さがある。2層は1986年までの現代水田の耕作土である。3層は2層の水田床土である。4層は暗灰色をした粘りのある層であるが、I区～III区までの地層堆積の中に同じ層は観察されなかった。4層は水田耕作土で、上(a)・下(b)に区分できる。4bは乾くと白っぽくなり、硬くなる。さらにクラックがはしることから、最上面は一時期4aの水田床土であったことが考えられる。7層は4b層の水田床土で、酸化鉄が沈着している為に赤褐色となっている。7層はII区の5層に対応する層で、各セクションで観察される。8層は2枚に区分できる。8a層は、旧表土である。8b層は



第26図 IV区と排土から採集した遺物の実測図



第27図 縄文時代遺物と柴田義弘氏採集資料

8a層と同じレベルで南側方向に延びているが、9層の水田床土の酸化鉄が連続していることから、畦畔であると考えられる。8b層の下部で、9層の上面を水田床とし、これに畦畔を築いている。この畦畔の南に浅い凹部があり、ここから弥生時代前期の小形の壺2個が出土している。(8b)層以下は河川堆積物であり、これを掘削して形成した溝流入土が10層～14層まで観察された。15層以外は、青灰色の粘土層である。14層～16層にかけては、植物遺体が観察された。

(2) VI区の遺物(第26図129～135)

すべて断面採集によるもので、出土層については表3に記してある。

129は内面は二枚貝条痕、外面はナデ、波状口縁に2条の沈線をめぐらす。縄文後期であろう。130は波状口縁に縄文と沈線をもつ西平式である。131は内面は剝落、外面は二枚貝条痕をもつ縄文後期土器である。132は胴部径5.7cmの壺で内面ナデ、外面は磨かれている。133は完形の壺で、刷毛調整の後に磨いており、沈線・刺突による文様をもつ。底部の対称的位置に2つの円孔をもつ。器高5.9cm・口径2.7cm・胴径5.0cm・底径3.2cmである。134は須恵器の釜で、135は須恵器の坏蓋である。

136～139は水路内や排土から、調査中に採集したものである。

## 6. 縄文時代の遺物（第27図140～149）

これまで触れる機会がなかったり、原位置とは考えられない所から出土したものをまとめて示す。140は構状把手をもつ部分で、沈線文を描く。141も沈線文のみをもつ。142は縄文と沈線によって入組文を描く。143は頸部に列点文をもつ。144～146は外面に縄文を施す。147は外面に巻貝を転がして、一見縄文風の効果を出している。148は両面共、巻貝条痕の調整である。149は両面共に磨きを加えた浅鉢である。

140～142は鐘崎式、143は鐘崎式から北久根山式前後と考えられる。144～148もこれらに共伴するものである。149は晩期後半に属す。

## 7. 採集資料(土器・骨器)(第27図150～156)

これらは柴田義弘氏により、調査着手前に溝状遺構周辺で採集されたものである。150は内面磨き外面は刷毛調整のまま3条の布目圧痕刻目の突帯をもつ。拓影右下部に縦方向の粘土紐（1本か？）の剝離痕がある。151は内面ヨコナデ、外面に9条ヘラ描き沈線をもつ。152～154は壺、155は中世の摺鉢、156は骨製で研磨によって刃部を尖らせたヘラ状骨器である。



表2 下郡桑苗遺跡出土遺物調査表1

| 図番号 | 器種及び形態 | 出土区位置 | 成形・施文の特徴           | 備考       | 図番号 | 器種及び形態 | 出土区位置 | 成形・施文の特徴             | 備考         |
|-----|--------|-------|--------------------|----------|-----|--------|-------|----------------------|------------|
| 1   |        | I-Va  |                    |          | 40  | 壺ⅡA    | Ⅱ12層  | 内面ナデ                 | 実用刷毛具同列み   |
| 2   | 壺ⅠB    | I-Va  |                    | 土器片加工品   | 41  | 壺ⅡB    | Ⅱ12層  | 内面はやや雑な磨き・外面は割落      |            |
| 3   |        | I     |                    | 1号貯蔵穴    | 42  | 壺Ⅱ     | Ⅱ12層  | 内面良好な磨き              | 同列み・工具不詳   |
| 4   | 壺ⅠB    | I     |                    |          | 43  | 壺ⅡC    | Ⅱ12層  | 内面ナデで内面刷毛のもの全周磨き     |            |
| 5   | 壺Ⅱ     | I 1号土 |                    | 1号土坑     | 44  | 壺ⅡA    | Ⅱ12層  | 内面刷毛のちナデ・外面割落状態      |            |
| 6   |        | I     |                    | 1号土坑     | 45  | 壺ⅡA    | Ⅱ12層  | 内面ナデ・刷毛具による割突列       |            |
| 7   |        | I     |                    | 1号土坑     | 46  | 壺ⅡC    | Ⅱ12層  | 内面ヘラナデ・口縁部周辺ココナデ     | 口径18.0cm   |
| 8   | 壺ⅡB    | Ⅱ4層   | 両面共磨き(外面は不良)       | 刷毛具列み    | 47  | 鉢      | Ⅱ12層  | 両面共磨き                | 2本単位沈没     |
| 9   |        | Ⅱ4層   | 両面磨き               |          | 48  | 壺Ⅱ     | Ⅱ12層  | 両面共磨き・外面先に刷毛         |            |
| 10  | 壺ⅡC    | Ⅱ4-5層 | 内面不詳・外面刷毛痕有り       | 2本単位沈没   | 49  | 壺ⅡA    | Ⅱ12層  | 両面共やや雑な磨き            |            |
| 11  | 壺ⅡB    | Ⅱ4層   | 内面磨きの・外面磨き         |          | 50  | 壺ⅡB    | Ⅱ12層  | 両面共磨き良好              | 2本単位沈没     |
| 12  |        | Ⅱ4層   |                    | 須恵器坏身    | 51  | 壺ⅡB    | Ⅱ12層  | 両面共磨き良好              | 2本単位沈没     |
| 13  |        | Ⅱ4層   |                    | 須恵器坏身    | 52  | 壺ⅡC    | Ⅱ12層  | 両面共磨き良好・東方への沈没も有り    | 2本単位沈没     |
| 14  |        | Ⅱ4層   |                    | 須恵器坏身    | 53  | 壺ⅡB    | Ⅱ12層  | 両面共磨き・外面は雑な仕上げ       |            |
| 15  |        | Ⅱ4-5層 | 径12.8cm            | 須恵器坏身    | 54  | 壺Ⅱ     | Ⅱ12層  | 全面磨き良好・外面黒色          | 直径9.3cm    |
| 16  | 壺ⅡA    | Ⅱ5層   | 全面ナデ・脚状具の刻目        | ヘラ磨き沈没   | 55  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデ・上部指押き痕          | ヘラ具同時列み    |
| 17  | 壺ⅠB    | Ⅱ7b層  | 内面ナデ               | ヘラ具列み    | 56  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面から口唇部は磨き・12層埋片有り   | 刷毛具同時列み    |
| 18  | 壺ⅡB    | Ⅱ7b層  | 内面ナデ・実用刷毛は同時       | ヘラ列みか?   | 57  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 両面共ナデ仕上げ・内面上端磨き      | ヘラ具による同時列み |
| 19  | 壺ⅡA    | Ⅱ7b層  | 両面共磨き・沈没文3本        | ヘラ列みか?   | 58  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面良好な磨き・上端ココナデ・外面ナデ  | 刷毛具同時列み    |
| 20  | 壺Ⅱ     | Ⅱ7b層  | 全面ココナデ             |          | 59  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデのち磨き             | 刷毛具同時列み    |
| 21  | 壺Ⅱ     | Ⅱ7a層  | 全面ナデ               |          | 60  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面磨き                 | 刻みに布目任痕    |
| 22  | 壺ⅠB    | Ⅱ13層  | 内面ナデ平滑・下半コゴ        | 刷毛具同時列み  | 61  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデのち部分的磨き          | 刷毛具同時列み    |
| 23  | 壺ⅠB    | Ⅱ13層  | 内面部分的磨き            | 刷毛具同時列み  | 62  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデ                 | 刷毛具同時列み    |
| 24  | 壺ⅠB    | Ⅱ13層  | 内面刷毛のち下部ナデ         | 刷毛具同時列み  | 63  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面板ナデ                | 刷毛具同時列み    |
| 25  | 壺ⅠB    | Ⅱ13層  | 内面磨き良・上端から外ココナデ    |          | 64  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデのち部分的磨き          | 刷毛具同時列み    |
| 26  | 壺ⅠA    | Ⅱ13層  | 内面磨きやや粗・外面ココナデで残有り | 刷毛具列み    | 65  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面良好な磨き              |            |
| 27  | 壺ⅠB    | Ⅱ13層  | 内面磨き良・内から外上端磨き     |          | 66  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデ・上端指でココナデ        |            |
| 28  | 壺ⅡC    | Ⅱ13層  | 内面は部分的磨き・外面磨き良     | 2本単位沈没   | 67  | 壺ⅡB    | Ⅱ11層  | 内面下端ナデ・上部は刷毛         | 刷毛具同時列み    |
| 29  | 壺ⅡA    | Ⅱ13層  | 両面共磨き良好            | 磨きの前に沈没文 | 68  | 壺ⅠA    | Ⅱ11層  | 内面ナデ                 |            |
| 30  | 壺Ⅱ     | Ⅱ13層  | 両面共磨き良好            |          | 69  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面下部刷毛・上部・実用はココナデ    |            |
| 31  | 壺ⅡC    | Ⅱ13層  | 内面磨き・口唇周辺ココナデ      |          | 70  | 壺ⅠA    | Ⅱ11層  | 内面ナデ・上端横方向の刷毛        | 刷毛具列み      |
| 32  | 壺ⅡA    | Ⅱ13層  | 内面磨き               | ヘラ磨き沈没7条 | 71  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面磨き・外面下部刷毛・上端刷毛     |            |
| 33  | 壺Ⅱ     | Ⅱ13層  | 内面と底面と外面上部は良好な磨き   | 直径10.2cm | 72  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデ                 | ヘラ具列み      |
| 34  | 壺ⅠA    | Ⅱ12層  | 内面ナデ               | 刷毛具同時列み  | 73  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面ナデ                 | 刷毛具列み      |
| 35  | 壺ⅠB    | Ⅱ12層  | 内面良好な磨き・外面ナデ       | ヘラ具同時列み  | 74  | 壺ⅠB    | Ⅱ11層  | 内面刷毛のち良好な磨き・刷毛具列み    | 12層出土破片あり  |
| 36  | 壺ⅠB    | Ⅱ12層  | 刷毛のち磨き             | 刷毛具同時列み  | 75  | 壺ⅡC    | Ⅱ11層  | 実用器から口唇部ココナデ・他は磨き良好  | 黒色硬質土器に似る  |
| 37  | 壺ⅠB    | Ⅱ12層  | 内面ナデのち部分的磨き        | 刷毛具同時列み  | 76  | 壺Ⅱ     | Ⅱ11層  | 内面磨き・外面ナデナデ・口縁周辺ココナデ |            |
| 38  | 壺ⅠB    | Ⅱ12層  | 内面はナデのちまばらな磨き      | 刷毛具列み    | 77  | 壺ⅡA    | Ⅱ11層  | 内面ナデ                 | 傾き不詳       |
| 39  | 壺ⅡB    | Ⅱ12層  | 内面磨き良好             |          | 78  | 壺ⅡB    | Ⅱ11層  | 全面ココナデ               |            |

表3 下郡桑苗遺跡出土土物観察表2

| 図番号 | 器種及び形態 | 出土区層・位置 | 成形・施文の特徴             | 備考        | 図番号 | 器種及び形態 | 出土区層・位置        | 成形・施文の特徴                    | 備考       |
|-----|--------|---------|----------------------|-----------|-----|--------|----------------|-----------------------------|----------|
| 79  | 甕ⅣA    | Ⅲ11層    | 内面ナデ                 | ヘラ掻き沈線8条  | 118 | 甕ⅡC    | Ⅲ10層           | 内面ナデ・外面刷毛                   | 2本単位沈線   |
| 80  | 甕ⅣA    | Ⅲ11層    | 内面部分的磨き              | ヘラ掻き沈線7条  | 119 | 甕ⅡC    | Ⅲ10層           | 内面磨き・外面ナデ                   | 2本単位沈線   |
| 81  | 甕Ⅳ     | Ⅲ11層    | 内面磨き良好・外面刷毛のち磨き      |           | 120 | 甕ⅡC    | Ⅲ10層           | 内面磨きか?外面部分的磨き               | 2本単位沈線   |
| 82  | 甕      | Ⅲ11層    | 内面ココナデで外面刷毛ナデに磨き     |           | 121 | 甕ⅣA    | Ⅲ10層           | 内面ナデか?外面刷毛のち磨き              | 竹管文      |
| 83  | 甕      | Ⅲ11層    | 内面と口唇はココナデ・外面は磨き     |           | 122 | 甕ⅡC    | Ⅲ10層           | 内面刷毛のち磨き・外面ナデ磨き             | 2本単位沈線   |
| 84  | 甕      | Ⅲ11層    | 内面刷毛のち磨き・外面磨き        |           | 123 | 甕Ⅰ     | Ⅲ9層            | 内面ココナデ                      | 刷毛具同時期   |
| 85  | 甕      | Ⅲ11層    | 両面共磨き・口縁部周辺ココナデ      |           | 124 | 甕Ⅴ     | Ⅲ9層            | 内面ナデ・外面ココナデ                 |          |
| 86  | 甕      | Ⅲ11層    | 両面共磨きの磨き             | 口唇部凹形削突   | 125 | 坏      | Ⅲ6層            | 底へう切・内ナデ・外ココナデか?            |          |
| 87  | 甕Ⅰ     | Ⅲ11層    | 両面共磨き・二枚貝の有軸木葉文      | 外面に赤色顔料   | 126 | 甕Ⅱ     | Ⅲ5層            | 内面ナデ的                       |          |
| 88  | 甕ⅡC    | Ⅲ11層    | 内面ナデのち磨き・外面磨き良好      | 2本単位沈線    | 127 | Ⅲ3・4層  | 内面刷毛か?外面ナデ?    | 瓦質土器                        |          |
| 89  | 甕ⅡA    | Ⅲ11層    | 内面下半ナデ・上半磨き・外面ナデ     |           | 128 | Ⅲ3層    | 赤茶色粘土・白色釉      | 唐津焼                         |          |
| 90  | 甕ⅡA    | Ⅲ11層    | 両面共磨き・外面に刷毛          |           | 129 | ⅤⅣ     | 内面二枚貝条痕・外面ココナデ |                             |          |
| 91  | 甕ⅡC    | Ⅲ11層    | 両面共磨きやや良             | 2本単位沈線    | 130 | Ⅳ      | 両面共磨きか?縄文有り    |                             |          |
| 92  | 甕ⅡB    | Ⅲ11層    | 内面部分的磨き・外面磨き良好       | 外面赤色顔料付着  | 131 | Ⅳ      | 外面二枚貝条痕        |                             |          |
| 93  | 甕ⅡC    | Ⅲ11層    | 両面共磨き・外面縦方向の沈線も有り    |           | 132 | 甕Ⅳ     | Ⅳ              | 内面ナデ                        |          |
| 94  | 甕ⅡA    | Ⅲ11層    | 外面沈線より内は良好な磨き        | ヘラ掻き沈線    | 133 | 甕Ⅳ     | Ⅳ              | 外面刷毛のち磨き                    |          |
| 95  | 甕ⅡA    | Ⅲ11層    | 内面ナデのち部分的磨き・外面磨き     | 2本単位沈線に磨き | 134 | Ⅳ      | Ⅳ              |                             |          |
| 96  | 甕Ⅱ     | Ⅲ11層    | 内面ナデのち磨き・外面良好な磨き     | 刷毛具刻み     | 135 | Ⅳ      | Ⅳ              |                             |          |
| 97  | 甕Ⅱ     | Ⅲ11層    | 内面部分的磨き・外面磨き         | 竹管状削突     | 136 | 甕ⅠB    | 水路             | 内面ココナデのち部分的磨き               | 刷毛具同時期   |
| 98  | 甕ⅢC    | Ⅲ11層    | 両面共磨き方向の磨き良好         | 布目状痕の刻み   | 137 | 甕ⅢB    | 水路             | 内面ナデ                        | 刷毛具同時期   |
| 99  | 甕ⅢB    | Ⅲ11層    | 内面磨き良好・外面刷毛          | ヘラ掻き沈線    | 138 | 甕ⅠB    | 水路             | 内面板ナデ 口径20.6cm              | 刷毛具刻み    |
| 100 | 甕ⅢB    | Ⅲ11層    | 内面磨き・外面刷毛            | ヘラ掻き沈線    | 139 | 甕ⅣA    | Ⅳ非土            | 内面ココナデ・ヘラ掻き沈線               |          |
| 101 | 甕ⅢB    | Ⅲ11層    | 内面磨き・外面刷毛のち施文        | 2本単位沈線    | 140 | Ⅱ4層    | Ⅱ              | 内面不詳・外面ナデ                   |          |
| 102 | 甕ⅣD    | Ⅲ11層    | 内面ナデ・外面部分的磨き・半截竹管状   | 半截竹管の沈線か? | 141 | Ⅲ12層   | Ⅲ              | 内面磨き・外面ナデ                   |          |
| 103 | 甕      | Ⅲ11層    | 内面下部ナデ・上部磨き・外面刷毛のち磨き | 底径8.2cm   | 142 | Ⅲ11層   | Ⅲ              | 内面磨き・外面は沈線・縄文・磨きの順          |          |
| 104 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面磨き良好・口縁内側ココナデ      | 刷毛具同時期    | 143 | Ⅱ5層    | Ⅱ              | 内面磨き・外面ナデ又は磨き               |          |
| 105 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面下部磨き・上部ナデ          | 刷毛具同時期    | 144 | Ⅲ11層   | Ⅲ              | 内面ナデ・外面縄文                   |          |
| 106 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面精密刷毛のちナデ           | 刷毛具同時期    | 145 | Ⅲ11層   | Ⅲ              | 内面磨き・外面縄文                   |          |
| 107 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面下部ココナデ             | 刷毛具同時期    | 146 | Ⅲ11層   | Ⅲ              | 内面ナデ・外面縄文                   |          |
| 108 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面ココナデ               | 刷毛具同時期    | 147 | Ⅲ11層   | Ⅲ              | 内面磨き刷毛のちナデ・外面共磨き縄文          |          |
| 109 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面ココナデ               | 刷毛具同時期    | 148 | Ⅲ10層   | Ⅲ              | 両面共磨き条痕                     |          |
| 110 | 甕Ⅰ     | Ⅲ10層    | 内面下部磨き・上部ココナデ        | 刷毛具刻み     | 149 | Ⅲ10層   | Ⅲ              | 両面共磨き方向の磨き                  |          |
| 111 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面斜方向の磨き             | ヘラ刻み      | 150 | 甕ⅡA    | 葉田採集           | 内面は磨き良好・刻目は布目状              |          |
| 112 | 甕ⅠB    | Ⅲ10層    | 内面刷毛のち磨き・外面磨きの磨き     | ヘラ刻み      | 151 | 甕ⅣA    | 葉田採集           | 内面はナデ・外面は刷毛のちヘラ掻き沈線         |          |
| 113 | 甕ⅠC    | Ⅲ10層    | 内面刷毛のち磨き             | 痕き不詳      | 152 | 甕Ⅳ     | 葉田採集           | 内面磨きの磨き・外面刷毛のち磨き            | 口径14.8cm |
| 114 | 甕ⅣB    | Ⅲ10層    | 器表不詳                 | 石英が多い     | 153 | 甕Ⅱ     | 葉田採集           | 内面ナデ・外面良好な磨き                |          |
| 115 | 甕ⅡC    | Ⅲ10層    | 両面共磨き・外面は部分的         | 2本単位沈線    | 154 | 甕ⅡA    | 葉田採集           | 内面ナデのち部分的磨き・外面磨き            | ヘラ掻きか?   |
| 116 | 甕ⅡA    | Ⅲ10層    | 内面磨き・外面刷毛のち部分的磨き     | ヘラ掻き沈線か?  | 155 | 葉田採集   | 瓦質             | 割片                          |          |
| 117 | 甕Ⅱ     | Ⅲ10層    | 外面刷毛・赤色顔料付着          |           | 156 | 骨器     | 葉田採集           | 現存長8.3cm幅2.3cm厚さ0.8cm 重さ13g |          |

## 第4章 出土・遺物について

### 1. 土器について

第3章で下部桑苗遺跡の土器を遺構及び層位毎に示してきたが、ここで弥生式土器の編年の位置づけについて検討しておきたい。器種別に分類し述べてゆく(表2・3参照)。

**壺** I～V類に分ける。突帯をもつものをI～V類とし、口縁部の内傾するものをA、外傾するものをB、刻目のないものをCとする。

I類は口縁部外側下位に1条の突帯をめぐらすもので、最も一般的な下城式である。

II類は口縁部外側に2条の突帯をもつものであり、胴部にも突帯をめぐらし上下の突帯を縦につながり粘土紐をもつを含める。II類も下城式だが少数派に属する。

III類は胴部がふくらみ口縁部が強く外湾するもので、板付系の如堂形口縁の壺とI類との折衷形である。

IV類は口縁端部に近く1条の突帯をもち、胴部から口縁部が内湾するもので、北部九州の口縁端に断面三角形の突帯をめぐらす土器とI類との折衷形と考えられる。

V類は口縁部上端が断面三角形の突帯状をなすもので、前期後半の瀬戸内系土器<sup>(第1)</sup>である。

VI類は突帯や沈線のないものを一括した。

VII類は口縁部外面上部に沈線や列点文をめぐらす瀬戸内系土器であり、A・Bに細分する。Aは口縁部がゆるやかに外湾したり、折れ曲がるもので、胴上部にへら描き沈線や列点文をもつもの。Bは口縁上端に断面三角形の突帯がめぐるもの。愛媛県の編年ではAは前期後葉に位置づけられており、32・44・79等はその第I様式第4型式に、16は第I様式第5型式に該当する。同じくBは中期初頭とされる第II様式第1型式に該当する。

VIII類は逆L字形の口縁部をもつ中期前葉の北部九州系土器である。

**壺** I～V類に分ける。

I類は二枚貝により木葉文を描くもので、山口県西部から北九州の東寄り地域の前期後半～末の高槻式に似る。

II類は本遺跡の主体をなす壺で、突帯で沈線をもつもので、後者を沈線の施文手法によってA～Cに細分する。Aはへら描き沈線、Bは沈線内を磨くもの、Cは2木単位の施文具による沈線で、沈線内に磨き、引き直し等を加えないものである。

III類は瀬戸内系土器で、A～Dに分ける。Aは幅広の低い削出し突帯をもつ前期中頃のもの、Bは頭部に10条ほどのへら描き沈線をめぐらし列点文をもつもの、Cは布目匠痕のある突帯がめぐるもの、Dは竹管状の刺突と同じ施文具による沈線と思われるものをもつもので、B～Dは前期末頃に属する。

IV類は小形のもの。

V類は胴部に3条の断面三角形突帯のつくもので、中期前葉の北部九州系土器である。

本遺跡の主体をなす土器は、壺Ⅰ・Ⅱ類の下城式壺と壺Ⅱ類である。下城式壺は縄文晩期の刻目突帯文土器の系譜を継ぎ、東九州沿岸部に主要分布域をもち弥生前期後葉から中期中葉まで存続したものと知られている。しかし、時間的な幅をもつにもかかわらず形態的な変化に乏しく、個々の土器について細かく時期比定できる段階に至ってない。一方、壺Ⅱ類もその主要分布域である別府湾から壺後水道沿岸において良好な調査報告例に恵まれていないのが現状である。これら在地系土器とは別に、すでに述べてきたように周辺地域から持ち込まれたと考えられるものが認められるので、主にこの資料によって本遺跡の編年的位置づけを行ってみたい。Ⅰ区とⅣ区では層位的に上下に比較できるほどの量が出土していないので、Ⅱ区とⅢ区を中心に考えることとする。

Ⅱ区の水田開遺跡構の時期は、覆土の7b層の壺Ⅳ類から中期前葉と考えられ、層位的にはⅢ区の8層から9層に対応するものである。Ⅲ区の9層からも中期前葉の壺Ⅴ類が出土しているので、遺物の面でも矛盾しない。Ⅲ区の10層からは中期初頭の壺ⅥB類と前期中頃の壺ⅢA類が出土しているが、下層との関係で壺ⅢA類は原位置とは考えられない。Ⅲ区の11層からは、前期後半の壺Ⅴ類、前期後葉の壺ⅦA類・壺Ⅰ類と前期末頃の壺ⅢB～D類、その他のものが出ている。壺の口縁部資料は長く外湾するものが多く、段をもたないようであり、前期末～中期初頭の特徴といえる。壺Ⅱ類の96の丸く短い胴部によく似たものが、大分市内の尾崎遺跡<sup>(註3)</sup>にみられ、口縁部と頸部との境に明瞭な段をつくる点も加味して前期後半に比定されている。Ⅲ区の12層からは、前期後葉の壺ⅥA類が出土している他、口縁部と頸部との境にかすかな段をもつ壺(48)がみられ、同じく前期後葉に属するものであろう。Ⅲ区の13層からは前期後葉の壺ⅥA類・断面M字形の突帯をもつ壺Ⅱ類が出土している。13～11層では前期後半～中期初頭の範囲で考えられるものが出土し、やや時期幅のある構成をなしているが、溝状遺構が河である可能性が強く、それを反映しているであろう。(高橋)

- 註1 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号 倉敷考古館1982  
註2 壺Ⅱ類は弥生前期末～中期初頭であるとの高橋敬氏の御教示を得た。  
註3 長井数秋「弥生式土器の編年」『愛媛県史原史・古代Ⅰ』1982  
註4 讃岐和夫・松田政基「尾崎遺跡」大分市教育委員会1984

## 2. 木器について

県内では1958年に九州文化総合研究所が実施した安国寺遺跡<sup>(註1)</sup>の発掘調査が木器研究の端緒となった。ここでは弥生後期の箸手・多又鋏の他、ジョッキ形木器、織機具、木杵等、1985年にはさらに建築部材も出土している。

その後、1962年大分大学により、大分市板ノ市に所在する一本中安遺跡<sup>(註2)</sup>の調査が実施され、ナスビ

形（長さ50.5cm・幅20.3cmで、厚さ頭部で1.6cm・身幅の中央1cm）、二又、三又鉞類と機織具が出土している。これらは報告書では弥生前期末～中期初の土器に相伴するとされるが、ナスビ形木器及び相伴土器形態から、安国寺遺跡同様、後期資料として捉えられる。

この安国寺、一木中安遺跡の調査以後、20年以上木器出土遺跡の調査は県内では皆無であったが、1986年に一般国道建設に伴い県教委が調査した中津市樋多田遺跡<sup>(註3)</sup>から、弥生中期初頭の鉞、杭等の木器が発見された。

いずれにしろ、木器資料の稀少な大分県において、出現期にあたる木器を下郡桑苗遺跡で確認できたことは非常に有意義なものと言える。さて、下郡桑苗遺跡で木器、木材が出土するのは11～13層で、その大部分が11層中であることは前述した。各層出土土器からは、13層～11層は弥生時代前期後葉～中期初頭に編年されており、わずかではあるが、時期差があるものとして確認されている。

出土木器（特にここではある程度編年上で形態の推移が確認できる鉞類）からは、13層に柄ぶり部の隆起が不明瞭な平鉞しか出土しないことが、11層との差異として確認できるが、時期差として捉えるには未だ資料不足である。

当遺跡で出土した平鉞は大きく2タイプに分けられる。第一は11層下部から出土した舟状隆起の柄ぶりをもつもので、山口謙治氏の分類による平鉞B<sup>(註4)</sup>にあたるものであるが、基部に近い両側縁に挿入部をもつ点で若干異なる。このタイプは鬼虎川遺跡AⅡb類に類似すると考えられる。また、第二は13層で出土し、当遺跡では圧倒的多数を占めるタイプである。これは九州では初例であり、山口分類には無い。このタイプの特徴として、柄ぶり部の隆起が不明瞭で、ほとんど反りのない直線的な身厚な断面をもつ平鉞で、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡（弥前）、東大阪市鬼虎川遺跡（弥前末～中初）松江市西川津遺跡（弥生前・中期中葉）に類例を見ることができる。

いずれにせよ、このタイプの平鉞は類例に乏しく、以下のようにまとめておきたい。

1 時期的に弥生時代前期に出現し、中葉までで消滅したか、あるいは後期に特徴的な、山口分類による平鉞Gと呼ばれる釣鐘状の形態をし、隆起部がなく方形孔をもつタイプに変移する可能性がある。

2 分布が九州では確認できないことから下城式土器に伴う独自のタイプとして捉えられるか、あるいは類例が主として瀬戸内海沿岸地域で確認できることから、同地域流行タイプとして見ることも可能である。

（牧尾）

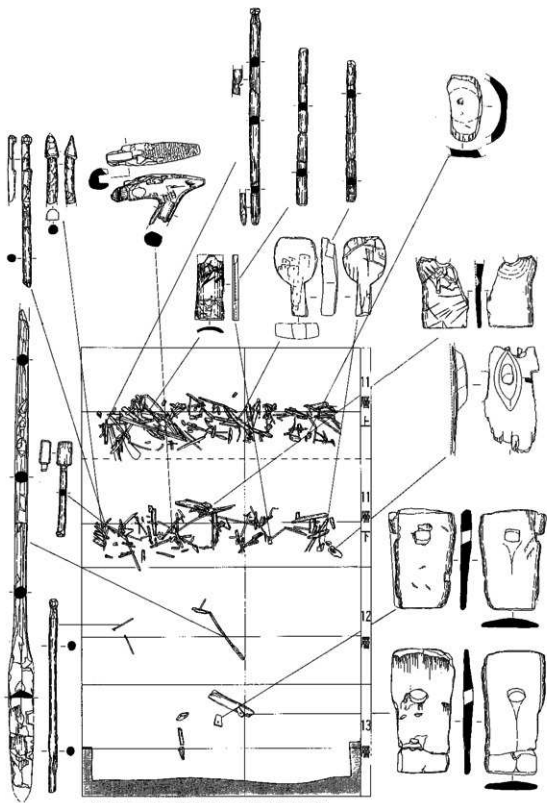
註1 『安国寺弥生式遺跡の調査』九州文化総合研究所編 毎日新聞社 1958

註2 『丹生川』大分大学学芸部総合調査報告 1963

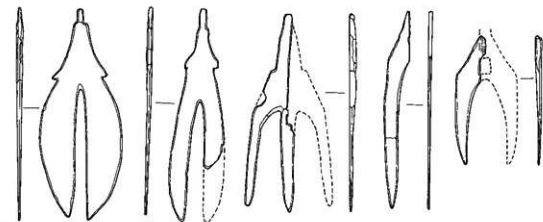
註3 『中津市加来地区遺跡群』大分県教育委員会 1986

註4 山口謙治「福岡における弥生木製農具」『考古学ジャーナル』N9232 1988

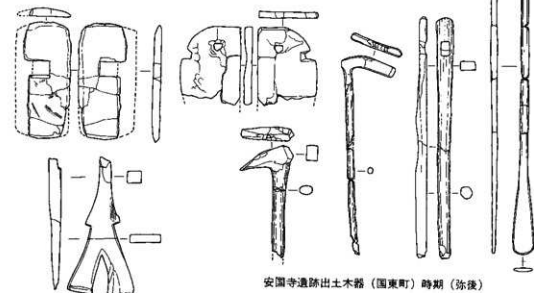
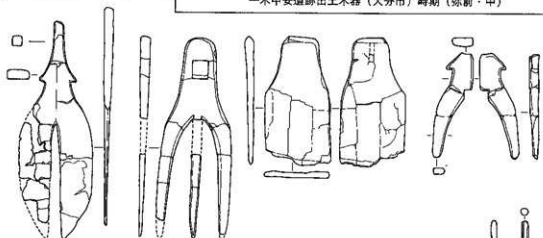
註5 『鬼虎川の木質遺物』—第7次発掘調査報告書第4冊—財団法人東大阪市文化財協会1987



第28図 下郡桑苗遺跡出土木器層別出土図



一木中安遺跡出土木器（大分市）時期（弥前・中）



安国寺遺跡出土木器（国東町）時期（弥後）

第29図 県内弥生時代遺跡出土木器（『安国寺遺跡、国東町教育委員会 1989より』）

## 第5章 自然科学的方法による調査

### 下郡桑苗遺跡出土の大型植物遺体

大阪市立大学理学部 粉川 昭平

大分県大分市大字<sup>しもごり</sup>下郡に所在する「下郡桑苗遺跡」は、大分川右岸の自然堤防とその東方の丘陵との間の沖積地にあり、渠道建設に伴う水路工事中に発見された。縄文時代後期の貯蔵穴を含む層と、それをきる弥生時代（前期後葉～中期前葉の土器を共存）の溝状遺構（あるいは自然河川）と、両者をきる古墳時代の土坑とよりなっている。

大型植物遺物を含む試料は、縄文時代のものが植物遺物を取り出しタッパーに入れて水づけにしたもの2個と植物遺物を含む土そのまゝ（これを「原土」とよぶ事とする）が1袋（No.1）、弥生時代のものとして二層単にわたる原土3袋（No.2, 3, 4）が送付された。（Ⅲ区土層図を参照…編者註）

タッパーの試料は全部、原土の試料はそれぞれ数百グラムを0.25mm目のフルイで、植物質を選別し、双眼実体顕微鏡で観察し、現生種の標本と比較検討した。検出出来た試料は、70%のアルコール中に保存した。次に結果を述べる。

下郡桑苗1号貯蔵穴の埋土中よりえられた試料（縄文時代後期）。この試料はタッパー2個にわけられていたが、同一の試料との事であるので、両者を一緒にして報告する。試料をよく水洗して観察したところ次のものが同定できた。

イチイガシ? (*Cyclobalanopsis gilva*) — 果皮のみで、殻斗はみられない。やゝ完全なもの3個。先端の柱頭を残すもの3個。他はすべて大小の破片であった。

エノキ? (*Celtis sinensis*) — 果実の半分にわれたもの1個。枝の状態からエノキと推定した。

ヤマゲワ (*Morus australis*) — 種子1個。

シマサルナシ (*Actinidia rufa*) — 種子1個。暖地の植物。

その他、広葉樹の小材片7個余と木炭片1個があった。

№1の試料 これは原土で、縄文時代後期の自然堆積層の黒色砂質土である。

イスガヤ? (*Cephalotaxus drupacea*) (葉の破片1個)。フトイ属 (*Scirpus* sp.) (多数の種子)。スゲ属 (*Carex* sp.) (種子3個)。イネ科 (*Gramineae*) (地下茎の破片少量)。イボクサ? (*Aneilema keisak*) (種子1個)。タデ属 (*Polygonum* sp.) (表面がざらざらで光沢のないレンズ形の種子数個)。ギシギシ属 (*Rumex* sp.) (果実1個)。フジ属 (*Wistaria* sp.) (冬芽2個)。ニワトコ (*Sambucus sieboldiana*) (種子1個)。ナス属 (*Solanum* sp.) (種子1個)。その他、常緑樹の葉の断片（同定できない）や、多数の小木材片（中にとげのあるウコギ科のようにみえるものがある。）と、わずかの木炭片もあった。



以上の2つの試料が縄文時代後期のものであるが、貯蔵穴の埋土中よりえられたものは、同定にやゝ疑問が残るが、すべてそのまま生食出来るものである。九州に於て貯蔵穴中のカシ類(ドングリ)はほとんどイチイガシの堅果ばかりであり、穀斗や効果はない。しかしこの試料では、果皮の破片が多く、この内容では貯蔵穴というよりごみ捨場の土壌のような感じがする。自然堆積層のものは、水湿地の草本にわずかの木本を含んでいる。水辺の湿地のような環境を示す。

次に2層準にわたる3つの弥生時代の試料(No. 2, 3, 4)について述べる。

**№2の試料** 第11層の黒褐色土層より採取された原土で、弥生前期後葉~中期初頭の自然木を多く含む。

イネ(*Oryza sativa*) (穎-もみがら4個、うち3個は基部のみ)。イネ科(*Gramineae*) (地下茎や根、秆などの破片8片)。カヤツリグサ属(*Cyperus* sp.) (種子7個)。スゲ属A(*Carex* sp. A) (果に胚のあるもの、2個)。

スゲ属B(*Carex* sp. B) (果に嘴のないもの1個)。コナギ(*Monochoria vaginalis*.) (種子6個)。シイノキ? (*Castanopsis cuspidata*.) (果皮の小片7個)。イラクサ科(*Urticaceae*) (種子3個)。カナムグラ(*Humulus japonicus*.) (種子破片3片)。ヒメコウゾ(*Broussonetia kazinoki*.) (種子2個)。ヤマグワ(*Morus australis*.) (種子2個)。ゴハリマツモ(*Ceratophyllum demersum* var. *quadrispinum*.) (種子3個。うち2個は半分にわれたもの)。タデ属A(*Polygonum* sp. A) (3角錐形で表面に光沢あるもの、5個)。タデ属B(*Polygonum* sp. B) (3角錐形で表面に網目模様のあるもの)。ギンギン属(*Rumex* sp.) (果4個)。ナデシコ科(*Caryophyllaceae*) (種子1個)。アカザ科(*Chenopodiaceae*) (種子3個)。タガラシ(*Ranunculus scleratus*) (種子1個)。カタバミ(*Oxalis corniculata*.) (種子2個)。クサノオウ(*Chelidonium majus*.) (種子4個)。カラスザンショウ? (*Fagara ailanthoides*.) (果皮の小片1個)。エノキグサ(*Acalypha australis*.) (種子の半分割したものの3個)。バラ科? (*Rosaceae*) (小種子7個)。キイチゴ属(*Rubus* sp.) (小型で半分割しているもの1個)。タネツケバナ属(*Cardamine* sp.) (種子2個)。ノブドウ(*Ampelopsis brevipedunculata*.) (種子1個)。ブドウ属(*Vitis* sp.) (種子1個)。ウコギ属? (*Aralia* sp.) (枝に生じたとき3個)。マクワウリ類(*Cucumis melo*.) (半分にわれた種子の先端部1個)。ナス属(*Solanum* sp.) (種子3個)。シソ科(*Labiatae*) (網目模様のある種子2個)。

その他、不明の冬芽3個、不明の種子3個、小球状の菌核2個あり。また小材木片や木炭片が非常に多い。昆虫片は、翅鞘・脚・頭・腹部など16片あり。

**№3の試料** これは、No. 2と同一層準の第11層の黒褐色土より採取されたものである。No. 2とは約2mはなれている。

イネ(*Oryza sativa*.) (穎の基部11個、やゝ大きい穎の破片2個)。イネ科(*Gramineae*) (地下茎・秆・根などの破片21個)。カヤツリグサ属(*Cyperus* sp.) (種子1個)。スゲ属A(*Carex* sp. A) (種子1個)。シイノキ? (*Castanopsis cuspidata*.) (小果皮片6個)。イラクサ科

(*Urticaceae*) (種子5個)。カナムグラ (*Humulus japonicus*) (種子破片3個)。ヒメコウソ (*Broussonetia kajinoki*) (種子2個)。ヤマグワ (*Morus australis*) (種子5個)。クワクサ (*Fatouavillosa*) (種子1個)。ゴハリマツモ (*Ceratophyllum demersum var. quadrispinum*) (種子8個、うち完全なものは3個)。タデ属A (*Polygonum* sp. A) (種子20個。この中には、ギシギシ属がある疑がある)。タデ属B (*Polygonum* sp. B) (種子1個)。ギシギシ属 (*Rumex* sp.) (果19個)。ザクロソウ (*Mollugo striata*) (種子3個)。キイチゴ属 (*Rubus* sp.) (小型の種子3個)。カタバミ (*Oxalis corniculata*) (種子3個)。ブドウ属 (*Viti* sp.) (種子1個)。マメ科 (*Leguminosae*) (緑豆類似のマメの子葉が焼かれ木炭化したもの3個)。ウコギ属? (*Aralia* sp.) (とげ1個)。マクワウリ類 (*Cucumis melo*) (種子4個で小型)。ヒョウタン類 (*Lagenaria* sp.) (種子完全なもの1個。破片1個。完全なものは、底辺7mm、高さ10mmの三角形)。ナス属 (*Solanum* sp.) (種子4個)。シソ科 (*Labiatae*) (網目椀様ある種子4個)。オナモミ (*Xanthium strumarium*) (絵巻の破片3個)。タカサブロウ (*Eclipta prostrata*) (種子1個)。

この他シャジクモ科 (*Characeae*) の卵胞子1個、不明の冬芽2個、不明の種子数個、小球状の菌核2個があった。又、小木材片は多く、木炭片はわずかであった。昆虫片は、翅鞘・脚・頭部などの他蛹も含め17個あり。さらに、貝殻の小片が3個と靱帯が1個、魚類の鱗の破片が4片認められた。

このNo.3の結果は、No.2と非常によく似ている。同一層準で約2mはなれているだけであるから、当然かもしれない。

**№.4の試料** これは弥生時代の溝で、前述のNo.2やNo.3の層準の下の遺物の少ない第13層(黒色粘質土)より採取された原土である。

イネ (*Oryza sativa*) (穎の基部20個)。シイノキ? (*Castanopsis cuspidata*) (果皮破片1片)。カナムグラ (*Humulus japonicus*) (完全な種子1個)。ヒメコウソ (*Broussonetia kajinoki*) (種子1個)。イラクサ科 (*Urticaceae*) (種子4個)。タデ属B (*Polygonum* sp. B) (種子2個)。ギシギシ属 (*Rumex* sp.) (果12個)。ナデシコ科 (*Caryophyllaceae*) (種子3個)。カタバミ (*Oxalis corniculata*) (種子1個)。キイチゴ属 (*Rubus* sp.) (小型の種子2個、長約1mm程度)。マクワウリ類 (*Cucumis melo*) (種子1個。No.3のものよりやや大きい、長さ約7mm程度)。

この他、広葉樹の葉柄痕2個、菌核1個、小木材片や木炭の小片は多くみられた。昆虫片は脚・胸部等5片の他、蛹・トビゲラ類の果なども認められた。同定出来なかった種子が数個あり。又、小貝殻片1個、魚類の鱗が3片あった。

この試料からは、No.2,3に比し種類はわずかしかえられなかった。すべての種類がNo.2や3からは得られた。イネの穎はこの試料がもつとも多かった。

No.2,3,4の試料を全体としてみると、次の事項が注意される。ゴハリマツモやシャジクモ科のような淡水の沈水植物があり、あまり流れの早くない水溜りのような環境を示している。この事は

有機物にとんだ黒褐色粘質の細粒の堆積物である事からもうなづける。海の影響をうかがわせる植物は認められない。さらに、カヤツリグサ属A・B、スゲ属A・B、タガラシなどは好湿性の草本である。コナギ・タカサブロウ・タガラシなどは典型的な史前帰化水田雑草である。又、イラクサ科・カナムグラ・クワクサ・ギシギシ・ナデシコ科・アカザ科・ザクロソウ・カタバミ・エノキグサ・タネツケバナ属・オナモミなど多くの荒地や畑地の史前帰化雑草を伴っており、大型本木はシイノキのみである。栽培植物としてはイネ・緑豆類似のマメ・マクワウリ類（種子が小型）・ヒョウタン類がみられた。さらにわずかとはいえ、貝殻片や魚鱗の存在も注目される。以上のような事からこの弥生時代の溝は、当時ほとんど流れのない湿地を伴った水溜りのような状況で、周辺部にはひらかれた畑地や荒地に水田があり、住居址も遠くはなかったと思われる。大型の木器や自然木・土器片などは、人間によってなげ込まれたものであろう。

## 大分市下郡桑苗遺跡第Ⅲ区堆積物の花粉分析

北九州市立大学文学部 畑 中 健 一

下郡桑苗遺跡(弥生時代前・中期)は、大分市街地の東南、大分市大字下郡(北緯33°13'39" ; 東経131°38'17" ; 海拔約5.0m)に所在する。遺跡の東側は海拔100m前後の丘陵地に接し、西側は大分平野に続く低地帯で、別府湾に注ぐ大分川が本遺跡の近くを北流している。

花粉分析は本遺跡の第Ⅰの東隅と第Ⅲ発掘区の試料について行った。

第Ⅰ区の東側では地表下90~170cmの層から、10cm毎に採取した試料9点について花粉分析を試みたが、何れの試料からも化石花粉・胞子は殆ど検出されなかった。

第Ⅲ区では、発掘溝の壁面(0~230cm)から10cm毎に24点の試料(2~12層)を採取し、更に地表下230cm以下の堆積物(13層以下)をハンドボーラーを用いて採取した。

### 第Ⅲ区の分析結果

全層を通じて検出された花粉・胞子化石は次の通りである。

**樹木花粉:** マツ属、モミ属、ツガ属、スギ属、マキ属、コウヤマキ属、シイノキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、ヤマモモ属、ツバキ属、ブナ属、クマシデ属、カバノキ属、ニレ・ケヤキ属、エノキ・ムクノキ属、サワグルミ属、カエデ属、ハイノキ属、トネリコ属、カキ属、アカメガシワ属、ハンノキ属。

**低木・草本花粉:** グミ属、イボタノキ属、モチノキ属、ブドウ属、イネ科(野生型)、イネ属(イネ型花粉)、カヤツリグサ科、ガマ属、オモダカ属、サジオモダカ属、ヨモギ属、キク科、タデ属、ニワヤナギ属、ソバ属、スイバ属、アカザ属、タネツケバナ属、ハコベ属、ゲンゲ属、キツネノマゴ属、セリ科。

**シダ胞子:** ミズワラビ属、ウラジロ属、トウゲシバ属、イワヒバ属、ヒトツバ属、その他の単条型および三糸型胞子。

主要花粉・胞子の消長はダイアグラム(図1)に示すとおりである。これらの花粉・胞子の出現率はすべて、各試料毎に検出された樹木花粉の総数を基本数とした百分率で図示した。

13~11層: -240~-182cm(弥生前期後葉~中期初頭)

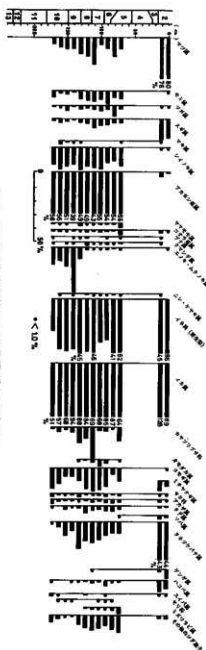
11層の堆積物には、材や植物片などが多量に含まれているが、これより下位の12・13層およびハンドボーラーで採取した13層以下の堆積物とともに、花粉化石は殆ど検出されない。

おそらく近くを流れる大分川の氾濫によって上流から運ばれた土砂が一時的に堆積したものと、推定される。

10~9層: -182~-132cm(弥生中期前葉)

花粉群集は常緑広葉のアカガシ亜属とシイノキ属の優占によって特徴づけられる。落葉広葉樹では

図1 下郡桑苗遺跡第Ⅲ区の花粉ダイアグラム



エノキ・ムクノキ属がいちじるしい増加を示し、-140cmの層準(9層)で最高値34%に達する。モミ・ツガ・スギなどの針葉樹各属は劣性であるが、マツ属はいちじるしい増加傾向を示している。

草本類では、野生型のイネ科花粉とイネ属型花粉が異常に多く出現する。また雑草と考えられるヨモギ・タデ・タネツケバナ各属も連続的に出現する。とくにタネツケバナ属はいちじるしい増加を示し、9層上部でピークに達する。このような花粉構成から推定すると、大分川の氾濫原?を利用して、水田の開発が急速に進み、イネの集約的栽培が行われていたと考えられる。この頃下郡桑苗遺跡周辺の丘陵地は、常緑カシ類やスダジイの優占する照葉樹林に覆われていたが部分的には農耕活動にかかわる人間干渉により、アカマツの二次林に変貌しはじめていたと推定される。

本層から高率に検出されるエノキ・ムクノキ属花粉は、おそらく河川の自然堤防などに生育していたエノキやムクノキに由来するものと考えられる。

8~5層中部:-132~-70cm

花粉構成は下位の層準といちじるしい相違は認められない。アカガシ属、シノキ属は連続して高率に出現し、安定した照葉樹林の存在を示唆している。しかしながら、10・9層の高率に出現したエノキ・ムクノキ属はこの層準で急減する。水田の開発に伴って、エノキやムクノキが伐採されたことを示すものであろう。草本花粉では、下位の堆積物では検出されないオモダカ属が連続出現する。またミズワラビ属の

胞子が8層上部から連続的に出現する。ウリカワ・オモダカ・アギナシなどのオモダカ属は、水田に普通にみられる雑草であり、ミズワラビも水田や用水路、池尻の湿地などに生育するシダ植物である。

イネ属花粉が高率(64~87%)に出現し、しかも明らかに水田雑草と考えられるオモダカ属やミズワラビ属を伴っていることから、より活発な稲作農耕が営まれていたことは疑う余地がない。

5層上部~2層下部: -70~-17cm

この層準の堆積物からは花粉・胞子は殆ど検出できなかった。11層以下の堆積と同様に、氾濫原堆積物と推定される。

2層: -17~0cm

下位の層準で優占したアカガシ亜属とシイノキ属は殆ど消滅し、かわってマツ属、スギ属が急増する。いちじるしい人間干渉による自然林(照葉樹林)の破壊、アカマツ二次林やスギ人工林の拡大を読みとることができる。

イネ属花粉は100%以上の出現率を示し、下層では出現しないミチヤナギ属やソバ属も出現する。タネツケバナ・ゲンゲ・ハコベ各属も増加傾向を示している。現代の水田耕土と推定される。

## 下郡桑苗遺跡の放射性炭素年代測定結果について

学習院大学理学部 木 越 邦 彦

年代値の算出には  $^{14}\text{C}$  の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は  $\beta$  線の計数値の標準偏差  $\sigma$  にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代です。また試料の  $\beta$  線計数率と自然計数率の差が  $2\sigma$  以下のときは、 $3\sigma$  に相当する年代を下限の年代値 (B. P.) として表示してあります。また試料の  $\beta$  線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計数率との差が  $2\sigma$  以下のときは、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}$  ‰ を付記してあります。

### 記

| Code No.  | 試料                        | 年代 (1950年よりの年数)              |
|-----------|---------------------------|------------------------------|
| GaK-14236 | Wood from 下郡桑苗遺跡<br>No. 1 | 3710 $\pm$ 210<br>1760 B. C. |
| GaK-14241 | Wood from 下郡桑苗遺跡<br>No. 2 | 3660 $\pm$ 200<br>1710 B. C. |

## 下郡桑苗遺跡出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館 西本豊弘

### はじめに

下郡桑苗遺跡Ⅲ区の11層から13層より出土した動物遺体は、貝類17種、ウニ類1種、甲殻類1種、魚類1種、爬虫類1種、哺乳類2種である。それらの出土内容は表に示した通りである。各動物群ごとくその特徴を述べるが、この遺跡で最も注目すべきことは、弥生時代にブタが飯養されていたことがはじめて明らかとなったことである。

### 1. 出土内容

#### a. 貝類

12層出土のヤマトシジミ1点を除いてすべて13層より出土したものである。フトヘナタリ、ハマグリ、シオフキ、オキシジミ、アサリなどが多く、その他の種は少量である。ハマグリは大型から小型までさまざまな大きさのものが含まれている。貝皮を残すものが大部分であり、焼けているものも少量見られた。淡水産の貝類としてマイマイ類とマルタニシが含まれていたが、マイマイ類は自然死したものが混入したものであろう。マルタニシは食料として利用されたかもしれない。

#### b. ウニ類

ウニ殻が1片見られただけである。形状からナガウニの可能性が大きいが、小破片のため断定できない。

#### c. 甲殻類

小型のカニのツメが2片含まれていた。種は不明である。

#### d. 魚類

魚の棘の破片が1片見られただけで、種は不明である。魚類やウニ類の出土量は少ないが、実際にはもっと多く利用されていたのではなからうか。

#### e. 爬虫類

スッポンの甲羅片1点が11層から出土したのみである。

#### f. 哺乳類

イヌとブタの家畜のみが出土し、シカなどの野性獣は出土していない。イヌは11層より前頭部を中心とした頭蓋骨1個分と左側

第1表 第13層出土の貝類

| 種名      | 左 |    | 右  |     |
|---------|---|----|----|-----|
|         | 大 | 中  | 小  | 計   |
| ハマグリ    | 大 | 17 | 16 |     |
|         | 中 | 71 | 86 |     |
|         | 小 | 48 | 76 |     |
| オキシジミ   |   | 14 | 13 |     |
| シオフキ    |   | 23 | 24 |     |
| アサリ     |   | 9  | 8  |     |
| ヤマトシジミ  |   | 9  | 14 |     |
| カガミガイ   |   |    | 1  |     |
| バカガイ    |   | 1  |    |     |
| サルボウ    |   | 1  | 1  |     |
| マガキ     |   | 1  | 1  |     |
| オオノガイ   |   |    | 1  |     |
| フトヘナタリ  |   |    |    | 54  |
| ツメタガイ   |   |    |    | 15  |
| マルタニシ   |   |    |    | 5   |
| イボキサゴ   |   |    |    | 1   |
| アタケガイ科  |   |    |    | 3   |
| マツバガイ?  |   |    |    | 1   |
| 陸産マイマイ類 |   |    |    | 1   |
| 種不明巻貝   |   |    |    | 2   |
| 巻貝のフタ   |   |    |    | 2   |
| 計       |   |    |    | 519 |

注 ハマグリの大・中・小の区分は殻長7~8cmを大、5~7cmを中、5cm以下を小とした。



頭骨1個が出土した。これらは同一個体かもしれない。イヌの形質を頭蓋骨から見ると吻部が細く高く、短いことが特徴である。そして、側吻部から頭前部にかけての屈曲が明瞭であり、頬骨弓が外に張り出し、後頭部が丸いイヌであったと思われる。このように吻部が短く頭の丸いイヌは縄文犬とは全く異なっている。また近畿地方の弥生時代犬には見られなかった形質である。おそらくこのタイプのイヌは、弥生時代に大陸から新たに持ち込まれたと思われる。

さて、ブタについてであるが、野性のイノシシではなく家畜のブタであると認定した形質的な特徴については後に述べるとして、ここでは出土内容を見てみようと思う。ブタの骨は11層が若干少ないが、この3つの層を一括して考えることにすると、ブタの頭蓋骨およびその破片は下顎骨を含めて11点である。四肢骨は21点、中手・中足骨および指骨は9片、椎骨は14点、肋骨は9点である。頭蓋骨や下顎骨の数からみて少なくとも雌の成獣1頭、若獣1頭、雄の若獣2頭、雌雄不明の成獣1頭、幼獣2頭の計7頭となる。

この遺跡の場合、ブタの出土内容は縄文時代の遺跡と比べて椎骨や肋骨が多く、しかも保存状態が良いことが特徴である。例えば愛知県豊田町伊川津遺跡（縄文晩期）では、イノシシの四肢骨495片に対してシカ・イノシシをあわせた椎骨は431点、肋骨は972点である。伊川津遺跡の場合、肋骨は長さ2cm程度の小さなものまで1片と数えている。それに対して、この遺跡では、ほぼ完形になる肋骨がほとんどである。このような椎骨や肋骨にみられる特徴は、遺跡の環境が骨の保存状態に適していたかもしれないが、この遺跡の中でブタの全身が解体されたことを推測させるものである。また、この遺跡では下顎骨は下顎枝片2点を含む3点と少ないことも特徴である。特に、成獣や若獣の下顎骨は1点しかない。この資料は、小さい破片であるが穴が穿たれた痕がみられるものである。この資料は、菜畑遺跡や唐古遺跡で知られるように、ある程度成育したイノシシ（ブタ）の下顎枝に穴が穿たれたりして、棒にかけられる儀礼が行われたことと関連するものであり、この遺跡ではブタの若獣、成獣の下顎骨が菜畑遺跡のような儀礼に用いられたものと推測される。

## 2. ブタの形質について

当遺跡出土のイノシシ類遺体について、それらが野性イノシシではなく、家畜化されている「ブタ」であると認定した根拠を述べておきたい。まず、頭蓋骨の特徴を個別に説明する。

### 頭蓋骨No. 1

13層出土 雌 成獣

保存状態：左右頬骨欠損。後頭骨の後端欠損。この部分はイヌ？の咬み傷多し。

形質の特徴。左第一後臼歯前部内側歯根付近に「歯槽膿漏」の症状あり。

- 他の歯種の歯槽も水平に後退する傾向あり。
- 上顎骨後部が前方に張り出す。
- 吻部の幅が広い。
- 頬骨弓が少し外へ張り出して、丸みをおびる。

- 口蓋骨最後端はV字状に切れ込む。(野性のニホンイノシシでは山型になるものが普通)
- 後頭骨後面の大後頭孔の上方が深くくぼむ。
- 骨が全体に野性イノシシよりも厚い。

#### 頭蓋骨No. 2

12層出土 雄 若獣 1.5歳

保存状態：吻部、左頬骨欠損。大後頭孔部分欠損。後頭骨上面から後部にかけてイヌ?の咬み傷多い。

形質の特徴◦1.5歳の若獣にしては前頭部から後頭部にかけて平坦であり、むしろ少しくぼむ。发育異常(過多)と推測される。

- 上顎骨後部が前方に張り出す。
- 吻部の幅が広い。
- 頬骨弓が少し外へ張り出して、丸みをおびる。
- 総ての歯の歯冠部にひだが多い。これは发育不良の特徴である。
- 左右の第二、第三前臼歯の歯槽が大きい。
- 口蓋骨最後端はV字状に切れ込む。
- No.1と同様に骨が全体に野性イノシシよりも厚い。

#### 頭蓋骨No. 3

13層出土 雌 若獣1歳前後

保存状態：吻端から鼻骨欠損。大後頭孔周辺欠損(人為的にはずされている可能性が大きい)後頭部後端にイヌ?の咬み傷少しあり。

形質の特徴◦上顎骨後部が前方に張り出す。

- 右第一後臼歯外側歯根部と左第一後臼歯根部「歯槽膿漏」が顕著である。

以上の3個の頭蓋骨の形質の主な特徴をニホンイノシシと比較しながら見てきた。家畜としての特徴として第一に歯周疾患(歯槽膿漏)の症状が見られる。これは柔らかい植物性の食料を主に食べていたことを示しており、イヌと人間に見られる特徴としてよく知られているものである。筆者は現生野性イノシシの頭蓋骨約100例の観察所見の他、多数の縄文時代のイノシシの頭蓋骨を見ているが、野性イノシシには歯槽膿漏は見られない。第二の家畜化の特徴は、上顎骨後部が前方へ張り出すことである。これは頭蓋骨を上から見ると、野性イノシシが四角いのに対して、丸みを帯びることを意味する。この特徴は紀元後数世紀から12世紀のオホーツク文化に伴うカラフトブタに見られる特徴でもある。ただしカラフトブタでは頬骨弓が外側と後方へ張り出すのに対して、この遺跡の資料ではそのような特徴は見られない。またこの特徴は朝鮮半島北部の新石器時代遺跡出土のブタの骨の形質と類似している<sup>(註1)</sup>。第三に吻部が幅広く短くなる。第四に頬骨弓が外に少し張り出し、頭部全体が丸みをおびる。第五に发育不良の歯や发育異常の頭蓋骨の存在である。第六に同年齢の個体では野性イノシシよ

第2表 プタの計測値

| No. | 計測部位      | No.1 (♀成獣)      | 現生標本(♀成獣) | No.2 (♂若獣)  | 現生標本(♂若獣) |
|-----|-----------|-----------------|-----------|-------------|-----------|
| 1   | Ect ~ Ect | 100.5           | 103.1     | 90.5        | 84.0      |
| 2   | Ent ~ Ent | 71.1            | 77.0      | 65.7        | 65.8      |
| 3   | Zy ~ Zy   | 137.0+ $\alpha$ | 141.0     | 122.0 $\pm$ | 117.2     |
| 4   | 吻 幅 (a)   | 50.2            | 53.1      | 54.0        | 47.0      |
| 5   | 吻 幅 (b)   | 64.7            | 62.3      | 64.0        | 56.8      |
| 6   | 吻 幅 (c)   | 69.3            | 68.2      | 65.9        | 60.2      |

註 No.1~3は斎藤弘吉「犬科動物骨格計測表」による測点。Ectは前頭骨頬骨突起の最外点、Entは眼窩縁の上縁の最内側点、Zyは頬骨弓の最外点。No.4~6は筆者の計測点。(a)は第2前臼歯中央部での吻幅。吻幅の最小値に相当、(b)は第1後臼歯中央部での吻幅、(c)は第2後臼歯中央部での吻幅。

りも骨が肥大していることである。これも動物園で飼育されている動物に見られる特徴として知られている。第七に口蓋骨後端部がV字状を成すことであり、この特徴はニホンイノシシには見られない。これは3個体総てに見られるため、個体差ではなく、ニホンイノシシとは系統を異にする形質的特徴と思われる。第八に、第七の特徴を含めて形質的特徴が、年齢差がありながら3個体に共通する点が多いことである。

以上の8つの特徴から、これらの頭蓋骨をイノシシではなく家畜化されたブタであると判断した。なおこれらの特徴の他に歯や頭蓋骨の形態的な特徴が存在するが、それらの検討は改めて論じる予定である。また四肢骨等の家畜化に伴う特徴は現在のところはっきりしないが、他の遺跡の資料も検討した後に明らかにしてみたいと思う。

第3表 ブタの層別出土部位

| 層     | 部位              | 所見   |
|-------|-----------------|--|
| 第11層  | 頭蓋骨№2           | 前頭部・大後頭孔部破損、♂・若獣(1.5歳?)<br>後頭部に犬?の咬み痕多い            |
|       | 上顎犬歯R           | ♂、若獣   |
|       | 後頭額片R           | 成獣   |
|       | 下顎枝R            | 若獣? 穴があげられていたと思われる                                 |
|       | 肩甲骨L            | 遠位部欠損 若獣   |
|       | 寛骨L             | ほぼ完存 成獣  |
|       | 脛骨L             | 遠位骨端のみの破片 若獣                                       |
|       | 大腿骨R            | 中間部破片  |
|       | 中手骨又は中足骨片       | 遠位部破片  |
|       | 胸椎1             | 幼獣 椎体のみ  |
|       | 頸椎1             | 若獣   |
| 胸椎1   | 若獣              |  |
| 肋骨2個分 | 若獣              |  |
| 第12層  | 後頭骨R            | 後頭額を含む。若獣?   |
|       | 上顎骨L            | 第4前臼歯と第1・2後臼歯あり、第2後臼歯の磨耗は少ない。第3後臼歯はおそらく萌出途中と思われる若獣 |
|       | 下顎枝L            | 幼獣   |
|       | 第1頸椎            | ほぼ完存 成獣  |
|       | 上腕骨L            | 中間～遠位部、成獣、犬?の咬み痕多い                                 |
|       | 上腕骨L            | 遠位部のみ、獣?   |
|       | 上腕骨R            | 中間部のみ、成獣?  |
|       | 桡骨L             | 幼獣   |
|       | 尺骨R             | 若獣、大型  |
|       | 大腿骨R            | 骨頭のみ、若獣  |
|       | 脛骨L             | 遠位部、成獣   |
| 脛骨R   | 近・遠位骨端はずれたもの、若獣 |  |
| 脛骨片   | 中間部のみ、RL?       |  |
| 中手骨2  | 若獣              |  |
| 頸椎1   | 若獣?             |  |
| 肋骨3個分 |                 |  |

| 層     | 部位       | 所見   |
|-------|----------|--|
| 第13層  | 頭蓋骨№1    | ♀ 成獣 鼻骨欠損 犬?の咬み痕多い   |
|       | 頭蓋骨№3    | 幼獣 1歳前後? 鼻骨欠損  |
|       | 頭蓋骨№4    | 生後1～2ヵ月の幼獣、頭蓋骨の破損が著しい。左右の前頭骨と上顎骨・脳下底?の若干の骨のみ残存。左上顎歯は第1～第4乳臼歯、右上顎歯は第4乳臼歯のみあり。すべて萌出はじめか萌出途中。 |
|       | 下顎骨(R)   | 第1・2乳切歯・乳犬歯・第3・4乳臼歯・第1後臼歯あり。第1後臼歯は未萌出。生後3ヵ月前後の幼獣   |
|       | 肩甲骨R     | 完存 成獣  |
|       | 桡骨L      | 遠位部片 若獣  |
|       | 桡骨R      | 成獣   |
|       | 尺骨R      | 成獣   |
|       | 桡骨L      | 遠位部のみ骨端はずれる。若獣   |
|       | 尺骨L      | 近・遠位部骨端はずれる。若獣   |
|       | 大腿骨R     | 若獣、大型  |
|       | 脛骨L      | 幼獣   |
|       | 中手骨2     | 若獣? 同一個体?  |
| 中足骨2  | 成獣 同一個体? |  |
| 基部骨2  | 成獣?      |  |
| 胸椎1   | 幼獣       |  |
| 胸椎8   | 若獣       |  |
| 肋骨4個分 |          |  |
| 計     | 64片      |  |

(註) L:左側 R:右側

幼獣:生後6ヵ月前後より幼ないもの。

若獣:生後6ヵ月より3歳未満のもの。

成獣:3歳以上のもの。

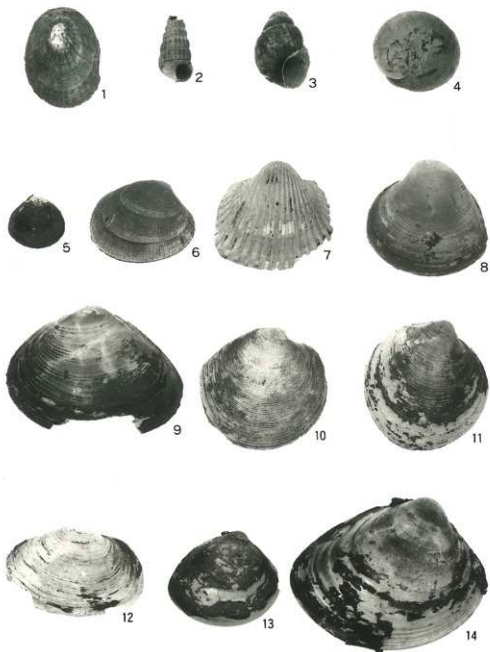
## おわりに

当遺跡の動物遺体の特徴は、はじめに述べたように弥生時代にブタが飼われていたことが明らかになったことである。そしてシカが全く出土していないことも特徴であり、狩猟・漁撈活動があまり積極的でなかったのかもしれない。またブタの下顎骨が少ないことと、穴を穿った下顎枝片が1点見られることから、この遺跡でもブタの下顎骨を用いた儀礼が行われていたことが推測される。弥生時代遺跡出土の『イノシシ』の下顎骨に穴が穿たれたり、それらが棒にかけられた状態で出土することについては、それらは狩猟儀礼であるとする意見があった。しかし、筆者の知る限りでは、縄文時代にイノシシの下顎骨に穴をあけて棒にかける事例はない。このようなイノシシ下顎骨の取り扱い、縄文時代の価値観から生まれたものではなく、別の価値観つまり農耕を伴う弥生文化によってもたらされたと考えている。すなわちイノシシの下顎骨を用いる儀礼は農耕儀礼の一環として行われていたと考えられる。今回、当遺跡においてブタが確認されたことはそのような儀礼がブタと共に日本にやってきたことを示すものと思われる。

最後に、このブタの系統について考えてみよう。ニホンイノシシを飼育した場合、頭蓋骨がどのように変化するかはよくわからない。しかし、当遺跡のブタは、現代のイノブタであろうと思われる骨とは形質的に若干異なっている。むしろイノブタに比べて、3個の頭蓋骨に共通して見られる形質的特徴から、1つの系統群として安定しているように思われる。このことから、ニホンイノシシとは別系統のブタが大陸からもたらされたのではないかと現状では考えている。ただし当時の大陸のブタがどのような形質のものであったのか実際に資料を見たわけではないので、この点については断定を避けたいと思う。ここで述べたブタの形質的特徴は、肉眼的観察所見をもとにした速報的なものであり、十分に検討したものではない。この遺跡のブタの形質的特徴については、弥生時代の他の遺跡のブタの検証の中で改めて論じる予定である。

この資料の分析にあたっては、東京大学文学部大学院生・新美倫子氏の協力を得た。また奈良国立文化財研究所・佐原眞先生には、文献の件でお世話になった。深く感謝の意を表します。

注1 筆者は実物を見た訳ではなく、写真からの判断である。キム・シンギョ(1973、1974)「わが国の原始遺跡にみられる哺乳動物相(I)、(II)、(完)」朝鮮学術通報X-6、XI-2、XI-3



図版 動物遺体(1) 貝類 2/3

- |           |           |             |         |           |
|-----------|-----------|-------------|---------|-----------|
| 1. マツバガイ  | 2. フトヘナタリ | 3. マルタニシ    | 4 ツメタガイ | 5. ヤマトシジミ |
| 6. アサリ    | 7. サルボウ   | 8. シオフキ     | 9. バカガイ | 10. カガミガイ |
| 11. オキシジミ | 12. オオノガイ | 13・14. ハマグリ |         |           |



図版 動物遺体(2) イヌ 3/4



図版 動物遺体(3) プタ頭蓋骨 No.1 1/2

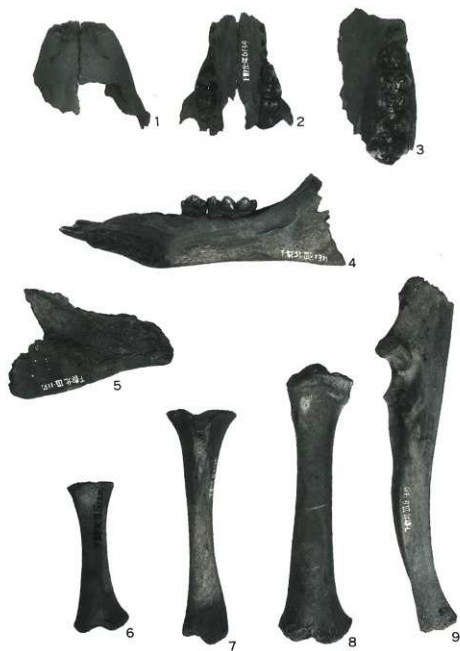




図版 動物遺体(4) プタ頭蓋骨 No.2 1/2



図版 動物遺体(5) プタ頭蓋骨 No.3 1/2



図版 動物遺体(6) ブタ 2/3

1・2、頭蓋骨No 4 (1.前頭骨 2.左右上顎骨) 3、左上顎骨 4、右下顎骨  
 5、右下顎枝片 6、左橈骨 7、左脛骨 8、左橈骨 9、左尺骨 (No 8 と同一個体)  
 1・2・4・6・7は幼獣、3・8・9は若獣、5は成獣。



図版 動物遺体(7) ブタ 2/3

1. 右肩甲骨 2. 左肩甲骨(若獣) 3. 左上腕骨 4. 右橈骨  
 5. 右尺骨(4と同一個体) 6. 左尺骨(若獣) 7. 右大腿骨



図版 動物遺体(8) ブタ 2/3

1. 第1頸椎(成獣) 2. 頸椎 3~6. 胸椎(4・5は幼獣。3・6は若獣) 7~9. 肋骨

# 下郡桑苗遺跡のプラントオパール分析

大分短期大学 佐々木 章

## 1. はじめに

イネ科植物の葉身中には、機動細胞と呼ばれる特別な細胞がほぼ一定密度で存在している。機動細胞は、葉身を展開させる役目をもった細胞と考えられており展開時には急激に膨張する。葉身が展開した後の機動細胞細胞壁には珪酸が沈積して珪化機動細胞となっている。珪化機動細胞は植物が枯死した後も永くその姿をとどめているので、珪化機動細胞の化石を土壤中から検出し、過去の植生や栽培植物を同定したり生産量を推定することができる。筆者らは、このような分析方法を開発し、プラントオパール分析法と呼んでいる。

このたび大分市下郡桑苗遺跡土壌のプラントオパール分析の機会を得た。下郡桑苗遺跡は大分川のバックマーシュに相当する湿潤な環境に営まれた遺跡である。

## 2. 分析方法

プラントオパールの粒径は直径が $50\mu\text{m}$ に満たないために、土壌に生じたクラックや根跡といった微小な隙間があっても上層のプラントオパールが当該土層中に紛れ込みコンタミネーションの原因となりかねない。そこで、クラックを避けるなど土壌試料の採取には細心の注意を払って筆者自身があたった。土壌断面から採土管をもちいて採取した分析試料は研究室にもち帰り通常の定量分析法によって分析した。超音波によって土壌を単粒化したのち、ストークスの法則にしたがひ、沈底法によって目的とする



図1 プラントオパール定量分析法 (ガラスビーズ法)

### 土器片の写真撮影

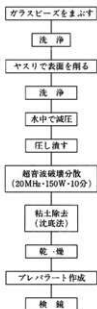


図2 土器胎土のプラントオパール分析法

フラクションを回収して顕微鏡で観察した。その手順を図1に示す。

このように細心の注意を払っても土壌が既にコンタミネーションを受けていた可能性を否定できない。そこで時期区分に最も有効な土器胎土そのもののプラントオパール分析も試みた。ただし、イネなどの作物が栽培されていた土壌とちがい、胎土の中のプラントオパール密度は小さい。分析の途中で少しでも紛れこめば、その影響は致命的である。今回はあらかじめ機動細胞に相当する大きさのガラスビーズをまぶしておいた土器片を分析に用いた。(図2)

### 3. 分析結果および考察

検出した主なプラントオパールを面積  $10\text{ a}$  ( $1,000\text{ m}^2$ ) 深さ  $10\text{ cm}$  の土壌あたりに換算し、さらに相当する植物体重に換算して図3・4に示す。イネについては生産されたであろう軽重をも推定してあわせて表示した。

埋没水田土壌中のイネ機動細胞プラントオパールは初に換算して  $10\text{ a} \cdot 10\text{ cm}$  あたり数t程度の例が多いが、この遺跡土壌中のイネ機動細胞プラントオパールは特に多い。イネに近縁なサヤスガサ属植物の機動細胞プ

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

| 植物名 |                                | 密度 ( $\times 10^4$ 個/g) |
|-----|--------------------------------|-------------------------|
| イ   | ネ <i>Oryza sativa</i>          | 3.40                    |
| ヨ   | シ <i>Phragmites communis</i>   | 1.44                    |
| タ   | ケ 亜科 <i>Bambusaceae</i>        | 20.83                   |
| ス   | ス キ <i>Miscanthus sinensis</i> | 2.79                    |

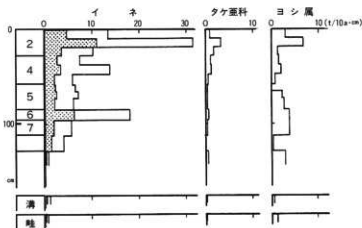


図3 II区土壌中のプラントオパール密度から推定した埋没植物体量 (イネのハッチ部は軽重)

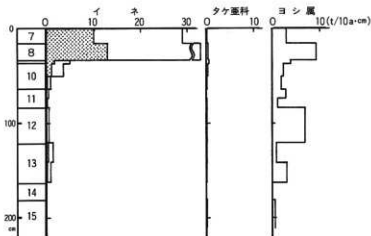


図4 III区土壌中のプラントオパール密度から推定した埋没植物体量 (イネのハッチ部は軽重)

ラントオパールはイネ機動細胞プラントオパールに良く似ているものもあるので誤って計数してしまい、その結果としてイネの値が過大になった可能性は考えられる。しかし、イネに似ているとは言ってもイネ機動細胞断面形の上端幅は比較的小さいの

表2 土器胎土のプラントオパール分析結果

| 土器型式     | 検出プラントオパール    |
|----------|---------------|
| 1. 鐘 崎 式 | ススキ・キビ族       |
| 2. 晩期浅鉢  | ススキ・ヨシ・タケ・キビ族 |
| 3. 下 城 式 | なし            |

に対してサヤヌカグサ属のそれは大きいので区別できる。また裏面のコンケイブもサヤヌカグサ属のほうが大きい。遺跡の周辺にはサヤヌカグサ属のエゾノサヤヌカグサが分布していることが分かっていたので、分析には細心の注意を払った。そのため、まちがって計数したとしても、その量は少い。また、ここのサヤヌカグサ属植物の系統の中にはイネ機動細胞と似た機動細胞をもつものがあるのかも知れないと考えて、周辺のサヤヌカグサ属植物を採集して機動細胞の形状を確かめた。採集できたのはいずれもエゾノサヤヌカグサであったが、その機動細胞はいずれもエゾノサヤヌカグサの特徴を示しており、イネと間違えるものは見いだせなかった。検出した機動細胞は、イネのものであろう。イナ藁の灰やイナ藁堆肥を多量に加えてもイネ機動細胞プラントオパール密度は高くなる。あるいは極端な密植と穂刈が続いても、同じである。

上層に比べて多量のイネ機動細胞プラントオパールが検出されたのはⅡ区では2・4・5・6層、Ⅲ区では7・8・13層などであった。5層は中世の、7層は弥生時代の土器包含層である。少なくとも弥生時代には13層を使って低湿地でのイナ作が営まれていたものであろう。

下郡桑苗遺跡からは弥生時代の下城式土器にまじって縄文時代の鐘崎式土器や晩期の土器も検出されている。イナ作の開始時期を知る目的で土器の胎土分析を試みた結果を表2に示す。イネの機動細胞プラントオパールは検出できなかった。



## 下郡付近の地形環境

大分大学教育学部 出田 和 久

下郡は大分川下流の右岸にあり、南に羽田、津守と続き、自然堤防などの微高地に古くから下郡遺跡や羽田遺跡などの弥生時代の遺跡の存在が知られていた。しかし、これまでは、発掘調査による確認はされていない。そこで、今後の調査の一助となることを期して、ここでは主として、この下郡から津守にかけての地域の微地形を中心に周辺の環境をみることにしたい。まず、地形分類図を作成するための資料として、大分市の2,500分の1都市計画図から等高線を抜き出したのが図1である。これにより、一見平坦のように見える下郡から津守の地域も、2メートル前後の高度差があることが分る。この図や大縮尺の地図、空中写真の判読などにより地形分類をしたのが図2である。この沖積低地の東には第四紀更新世の前～中期の大分層群からなる丘陵や更新世後期の段丘が分布している。以下では各地形の分布・形態を中心にみていくことにしよう。

下郡から津守にかけては、多数の旧河道が認められ、このあたりの河道の変遷が著しかったことを示している。下郡付近では、大分川に近い2本の旧河道はかなり明瞭で、ことに大分川から2本目の旧河道は凹地状の地形を残し、名残川というには小規模ではあるが殿川の小流がながれている。この

東側は自然堤防で、周囲の水田面との比高2メートルほどの段差が明瞭に認められる。羽田から津守あたりでは、旧河道の弧状パターンが目立つ。

大分川から2列目の下郡工業団地の東を通る旧河道の東側に、幅200メートル前後の自然堤防が旧河道に沿うように断続的に下郡から津守まで続いている。標高は下流側の下郡付近で6メートル前後、上流側の津守付近で8.5メートル前後で周囲の水田面との比高は1～2メートルである。自然堤防は砂など比較的粗粒物質で構成され、高燥であ

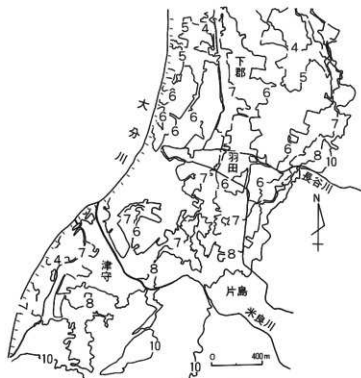


図1 下郡～津守付近の等高線（標高10m以下）

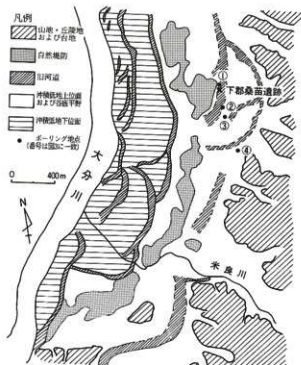


図2 下郡～津守付近の沖積面の地形分類

て、下郡から津守付近にかけては、上位・下位両面ともに旧河道がみられ、条里遺構はみられないが、上位面では下位面ほど旧河道は明瞭ではない。このような両者の差異が何に由来するのかも興味のあるところである。いずれにせよ、明野台地の西下の上位面を北上する旧河道は他の旧河道と比べると明瞭さを欠き、河道が放棄されてからかなりの期間が経過していることを思わせる。

ところで、河口に近い沖積低地の遺跡調査において、地形との関連で問題になることのひとつに、縄文時代の海進にも関係することであるが、海岸線がどのあたりまで入り込んでいたかという問題がある。一般に、縄文時代早期末から前期にかけての縄文海進の最盛期（約6000～5000年前）には、海水準は現在より2～3メートル高かったとされる。したがって、本地域でも、縄文海進による海面上昇にともなって、大分川に沿って別府湾が陸側に入り込んできていたと考えられるが、この時の海岸線はどのあたりにあったのか、ここで少し考えてみたい。千田（1987）によれば、花園の大分川左岸で高度1.5～2メートルのところにマガキの貝殻が見つかり、そのC-14年代が7,100年から6,600年B.P.の間で、縄文海進のピークの少し前に海水が進入してきておぼれ谷が形成され始めたところに、このあたりがマガキの成育する内湾の、湾底が礫質の環境にあったことを示している。このことは少なくとも、縄文海進のピーク時における海水準は+2メートル以上あったことを意味し、+3メートル前後の水準ではなかったかと思われる。

管見できたボーリングデータだけでは、十分ではないが、ごく大雑把に下郡付近の海岸線の位置を考えてみよう。図-3に示したのは上位面のほぼ南北のボーリングデータである。明らかにされた大分平野の沖積層の層序の構造（千田，1987）、および-15メートル付近は砂を中心とする層で、その上

るため、古くから集落や畑地として利用されてきた。たとえば、下部では長屋、畑中、屋敷、角屋敷、下屋敷などの字名がみられ、高燥の地を生かした土地利用がなされてきたことを示している。

旧河道と旧河道、旧河道と自然堤防あるいは丘陵との間は後背湿地となっている。この沖積低地面は上位面と下位面に区分され、両者の間には1メートル前後の段差がある。対岸の古国府～羽屋付近ではこの上位面には条里遺構がみられ、明瞭な旧河道はみられないことなどから、古代には上位面はすでに段丘化し、比較的稳定した地形面であったと考えられる。これに対し

にシルトを主とする層がのる層序などから、ここでシラスとされているのは、鬼界カルデラを噴出源とするアカホヤ火山灰で、その層厚から二次的堆積とみられる。このテフラの降下は約 6,300年前で縄文海進のピーク直前の時期にあたり、縄文海進における海岸線の陸側への入り込みを考えるときの重要な手がかりになる。ボーリングデータの①・③では、このシラスをはさんで貝化石や腐植物を含むシルトを主とする層が堆積していることから、このシラス層は静かな内湾に堆積したものである。また、さらにその上の砂層は、縄文海進のピークをすぎて海退にもなって河川からの運搬物質が堆積して形成されたものであろう。つまり、少なくとも大字下部の字橋ノ本あたりまでは海が入り込んできていたといえよう。縄文海進の後、陸化が進むにつれて砂が堆積し、さらに、陸化が進むと後背湿地的様相を呈し、シルトが堆積していく様子がこのボーリングデータからうかがえる。

また、ボーリングデータ④の位置は、長谷川の谷の出口付近にあたり、長谷川の扇状地性の堆積物がみられ、①～③とは異なる層序がみられる。南側の大字羽田あたりにもボーリングデータが得られると、もう少しはっきりと縄文海進における内湾の拡大範囲がとらえられよう。

下部桑苗遺跡では、縄文時代の後期頃のC-14年代(3710± 210年B.P, 3660± 200年B.P)を示す黒色粘土層の堆積がみられ、この層には植物質が多く含まれていたが、この堆積環境は縄文海進後の海退にもなって、明らかにこのあたりが後背湿地化したことを物語っている。また、弥生時代前期後葉には食用にしたハマグリ・シオフキ・アサリ・オキシジミなどの貝殻が出土したが、これらの貝は主に干潟あるいは砂底の内湾に生息するもので、北方に後退した海の環境を示唆している。

#### 参考文献

千田 昇(1987): 大分平野西部の完新世における地形発達. 地理学評論, 60, 466~480

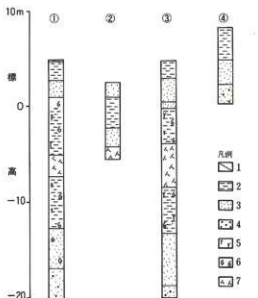


図3 下部付近の地質柱状図(一部簡略化)

1.表土 2.シルト・粘土 3.砂 4.礫 5.腐植物 6.貝殻 7.シラス  
①～④の位置は図2中に示す。

## 下郡桑苗遺跡出土木製遺物の樹種同定

大分県林業試験場 津 島 俊 治

九州大学農学部 小 田 一 幸

大分市大字下郡にある弥生時代前・中期の下郡桑苗遺跡から出土した木器や木材など34点の木製遺物について樹種同定を行ったので報告する。

樹種同定は、木口・柾目・板目の3断面の顕微鏡観察により確認される木材組織の諸特徴に基づいて樹種を同定し、樹種の明らかなプレパラートと対照して樹種を決定した。

プレパラートの作製は、水中貯蔵された資料から一辺が約5mmの立方体ブロックを切り出し、パラフィン切片作成法により得た薄切片をカナダバルサムで封入した永久プレパラートを作製した。

樹種同定結果を表一に示す。

資料34点のうち、針葉樹材が3樹種5点、広葉樹材が13樹種26点、竹材1点、不明2点であった。不明2点は広葉樹材であることは確認できたが、資料N9245は髓付近の収縮した資料であるため、資料N9210は帯状柔組織を認める環孔材であるが既存プレパラートとの対照結果、樹種同定できなかった。

表-1

下部炭苗遺跡出土木製遺物の樹種一覧表

| 資料 № | 和 名     | 学 名   | 写 真 |
|------|---------|---|-----|
| 4    | イヌガヤ    | <i>Cephalotaxus harringtonia</i>              | 1   |
| 13   | カジノキ    | <i>Broussonetia papyrifera</i>                | 4   |
| 18   | スギ      | <i>Cryptomeria japonica</i>                   | 2   |
| 27   | ヤマグワ    | <i>Morus bombycis</i>                         | 5   |
| 32   | チシャノキ属  | <i>Ehretia</i> sp.                            | 6   |
| 50   | チシャノキ属  | <i>Ehretia</i> sp.                            | 6   |
| 94   | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| 147  | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| 163  | コナラ亜属   | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Lepidobalanus</i> )   | 8   |
| 166  | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| 176  | ユズリハ属   | <i>Daphniphyllum</i> sp.                      | 9   |
| 179  | カキノキ    | <i>Diospyros kaki</i>                         | 10  |
| 189  | スギ      | <i>Cryptomeria japonica</i>                   | 2   |
| 191  | カジノキ    | <i>Broussonetia papyrifera</i>                | 4   |
| 210  | 不明(広葉樹) |   | 17  |
| 230  | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| 245  | 不明(広葉樹) |   | 18  |
| 274  | タラノキ    | <i>Aralia elata</i>                           | 11  |
| 279  | サカキ     | <i>Cleyera japonica</i>                       | 12  |
| 280  | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| 281  | カジノキ    | <i>Broussonetia papyrifera</i>                | 4   |
| 283  | トチノキ    | <i>Aesculus turbinata</i>                     | 13  |
| 286  | コナラ亜属   | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Lepidobalanus</i> )   | 8   |
| 288  | サカキ     | <i>Cleyera japonica</i>                       | 12  |
| 289  | サカキ     | <i>Cleyera japonica</i>                       | 12  |
| 290  | ヤブニッケイ  | <i>Cinnamomum japonicum</i>                   | 14  |
| 291  | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| 293  | アワブキ属   | <i>Meliosma</i> sp.                           | 15  |
| 294  | マタケ属    | <i>Phyllostachys</i> sp.                      | 19  |
| 295  | スギ      | <i>Cryptomeria japonica</i>                   | 2   |
| 297  | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| FR 1 | アカガシ亜属  | <i>Quercus</i> sp. ( <i>Cyclobalanopsis</i> ) | 7   |
| FR 2 | ヤマザクラ   | <i>Prunus Sargentii</i>                       | 16  |
| FR 3 | ヒノキ     | <i>Chamaecyparis obtusa</i>                   | 3   |



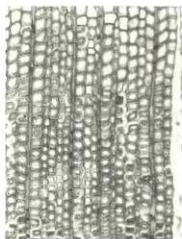
1. イヌガヤ (横断面) ×25



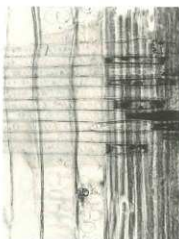
同左 (放射断面) ×50



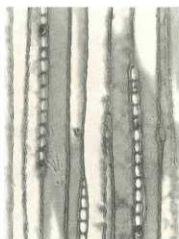
同左 (接線面) ×50



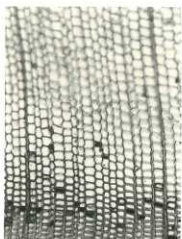
2. スギ (横断面) ×25



同左 (放射断面) ×50



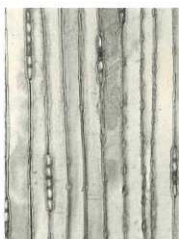
同左 (接線面) ×50



3. ヒノキ (横断面) ×25



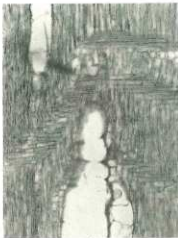
同左 (放射断面) ×50



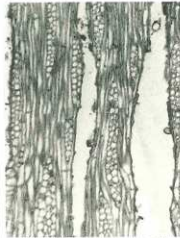
同左 (接線面) ×50



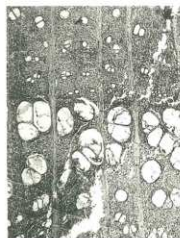
4. カジノキ (横断面) ×25



同左 (放射断面) ×25



同左 (接線面) ×25



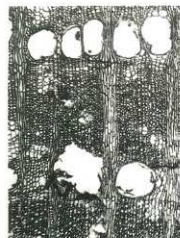
5. ヤマガク (横断面) ×10



同左 (放射断面) ×25



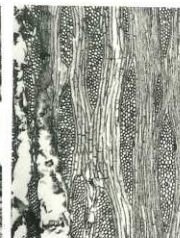
同左 (接線面) ×25



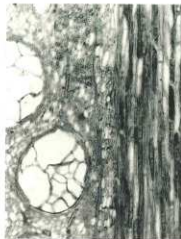
6. チシャノキ属 (横断面) ×10



同左 (放射断面) ×25



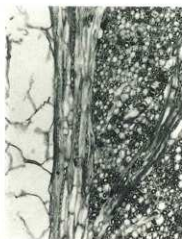
同左 (接線面) ×10



7. アカガシ亜属(横断面) ×25



同左(放射断面) ×25



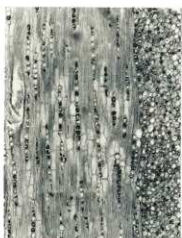
同左(接線面) ×25



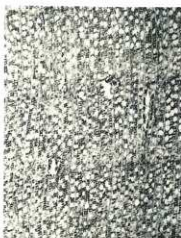
8. コナラ亜属(横断面) ×10



同左(放射断面) ×25



同左(接線面) ×25



9. ユズリハ属(横断面) ×10

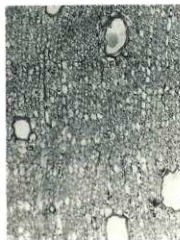


同左(放射断面) ×100

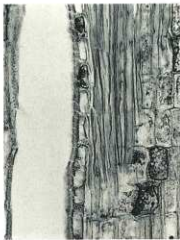


同左(接線面) ×25





10. カキノキ (横断面) ×25



同左 (放射断面) ×50



同左 (接線面) ×25



11. タラノキ (横断面) ×10



同左 (放射断面) ×25



同左 (接線面) ×25



12. サカキ (横断面) ×25



同左 (放射断面) ×25



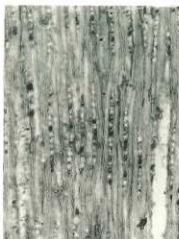
同左 (接線面) ×25



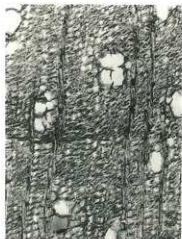
13. トチノキ(横断面) ×10



同左(放射断面) ×25



同左(接線面) ×25



14. ヤブニッケイ(横断面) ×25



同左(放射断面) ×50



同左(接線面) ×25



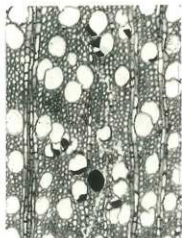
15. アワブキ属(横断面) ×25



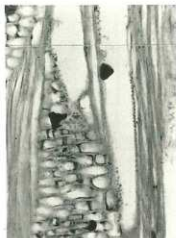
同左(放射断面) ×25



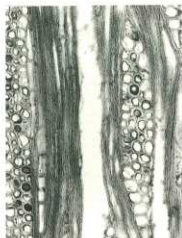
同左(接線面) ×25



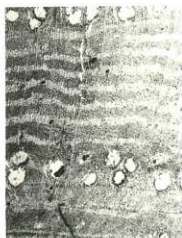
16. ヤマザクラ(横断面) ×25



同左(放射断面) ×50



同左(接線面) ×50



17. No.210(横断面) ×10



同左(放射断面) ×10



同左(接線面) ×25



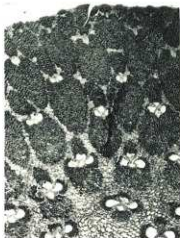
18. No.245(横断面) ×10



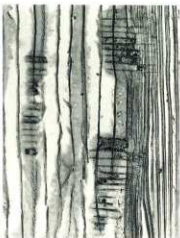
同左(放射断面) ×10



同左(接線面) ×10



19. マツケ属 (横断面) ×10



同左 (放射断面) ×25



同左 (接線面) ×25

## 第6章 まとめ

発掘調査の結果、下郡桑苗遺跡は縄文時代後期から近世までの遺跡であることがわかり、いくつかの重要な成果を得ることができた。本報告に寄せられた自然科学的分析を参考に、本遺跡の性格と出土したものの意味について簡単にまとめておきたい。

縄文時代の遺構としては貯蔵穴があり、イチイガシが出土した。地山をなす層は貯蔵穴の場所ではほぼ水平であるが、東側にあたるⅢ区に連なる壁面では粘質土・砂・植物遺体を多く含む層が互層になっていて、北方に傾斜している。つまり、貯蔵穴は縄文海進以後に形成された低湿な微高地の縁辺に掘り込まれたものである。

縄文時代の末か弥生時代の初めになると、溝状遺構が形成されたようである。この溝は地理的分析において指摘された旧河川推定域にあって同方向に走っており、旧河川のものではないが、関連する細流である可能性がある。埋土下部には弥生時代前期後葉～中期初頭の堆積層(11層～13層)がみられるが、これらの層からは花粉およびプラントオーバー分析ではほとんど資料が検出されておらず、水が流れる状態の中で堆積したものと思われる。13層(12層にも少し)は貝塚を形成していたが、周辺から投げ捨てられたものであろう。ハマグリをはじめとして内湾の砂底に生息するものが主体を占めている。樫が出土していることからしても、現在は陸化している本遺跡北方の低地域に内湾が入り込んでいたものと考えられる。11層の遺物は、大水によってながされてきたものが堆積したような状況で検出した。これらは本来、居住域と考えられる西方の大分川沿いの微高地から流れてきたものであろう。木製農耕具は西北九州のものとは異なり、瀬戸内沿岸と同じ様相を帯びている。鍬は平鍬のみが多数出土し、すでに他の地域では出現している又鍬がみられない。土地利用の方法の差なのか、調査面積のためか不明である。木製品には完成前のものがみられたが、水につけて木材を加工しやすい状態にしておいたのが大水によって流されたものと考えられる。

Ⅱ区では弥生時代中期前葉と考えられる水田らしい遺構を検出した。その面をⅢ区に追うと、その時点では河が埋まりきっていることがわかる。プラントオーバー分析では7層～8層にかけて多量のイネ科機動細胞が確認されており、水田面が重複しているものとみられる。

さて、下郡桑苗遺跡で注目すべき点は、検出された動物遺体がブタと認定され、出土したイヌと共に大陸の系統のものではないかと問題提起されたことである。弥生時代にブタはいなかったというのがこれまで一般に認められてきた考え方であり、この問題に一石を投じることになったわけである。

しかし、弥生時代におけるブタの飼育という問題は、研究史の中では決して唐突に現れたものではない。イノシシについては縄文時代の段階から、たんなる狩猟対象以外の取り扱われ方をされたのではないかと言われている。

北海道では縄文時代後・晩期に自然分布を越えてイノシシが現れていることが指摘され、加工品として利用するために骨が持ち込まれたのか、あるいはイノシシの幼獣にみられるしま模様を表現した土偶の存在から類推し、生きたまま移入したのではないかと考えられている。<sup>(註1)</sup>  
<sup>(註2)</sup>

加藤晋平氏は縄文前期における自然分布を越えた出土例と、前・中期のイノシシ幼獣の埋葬例からこの時期にはとらえられた幼獣の飼育という半飼育段階に達していたとする。また、イノシシ土偶は奈良県以東の後・晩期に現れているとし、中国の河姆渡遺跡にブタの土製品がみられることや、紀元前1000年紀の沿アムール・沿海州・中国東北部・朝鮮半島北部にブタの土製品が出現することの影響を東日本の縄文後・晩期文化は受けたのではないかとし、「イノシシに餌を与えて飼育するという家畜化への道を辿りはじめた」半飼育第Ⅱ期に入ったとしている<sup>(註3)</sup>。ただ、対馬(吉田貝塚)<sup>(註4)</sup>・志岐(宮下貝塚)<sup>(註5)</sup>・熊本(阿高貝塚)<sup>(註6)</sup>にも縄文中期の可能性のあるイノシシ形土偶がみられる<sup>(註7)</sup>。時期と地域に関して再考の余地があるものの、日本列島周辺の地域でブタの土製品が存在するという指摘は興味深い。なお、熊本県浜ノ洲貝塚(縄文時代後期)ではイノシシの頭骨を石で囲んだあとが検出されており、西日本でもこの時期にはイノシシに関する何らかの儀礼があったものと考えられる。

弥生時代の場合、主として動物考古学の研究者によってイノシシの飼育の可能性に関心が払われてきた。金子浩昌氏によると、中期の大坂府池上遺跡ではイノシシの53%が1~2才の少年個体であり、中国の西安半坡遺跡の飼育されたとみられているイノシシの大多数が1~2年前後までであったこと、河姆渡遺跡でも54%が少年個体であったことと比較して池上遺跡でも飼育が行われたのではないかとされている<sup>(註9)</sup>。愛知県朝日遺跡は前~後期の例だが、イノシシが約8割と多く、乳歯を残す幼獣が量的に安定した時期のもので40%と75%を示している。渡辺誠氏と磯谷和明氏はこうした点について、狩猟で捕獲した後飼育していた可能性を考えている。丹羽百合子氏によれば、大坂府田能遺跡ではシカは骨角器に利用される部位が出土していて専門の狩猟者から入手したと推定され、多量に出土したイノシシは年齢幅が狭いと指摘されている<sup>(註10)</sup>。木村幾多郎氏は北部九州の弥生時代貝塚を分析し、「イノシシの年齢構成については、今回検討した標本例が少く何もいえない」が、その占める比率は他のものに比べて高いとし、イノシシの飼育についても考慮している<sup>(註11)</sup>。弥生中期の島根県西川津遺跡の資料について井上貴央氏は、イノシシには幼獣が多くて縄文前期の陰田遺跡等には認められない点であると述べている<sup>(註12)</sup>。

このように、弥生時代はもとより縄文時代の段階からイノシシの飼育へと進行していたのではないかと考えられるようになってきている。今回下郡桑苗遺跡にはブタがいたことが指摘されたが、本遺跡の動物遺体の構成が縄文時代以降の一般的な出土状況の中でどのような位置を占めるかをながめておきたい。西日本の遺跡で、動物遺体の種と個体数とが報告されているものを中心に組成表を作成した(表4・5)。資料探索の余裕がなく、重要な遺跡が抜けていると思われるが、動物遺体のあり方の傾向は把握できるものと考えている。これによれば、地域と時期とを問わずイノシシとシカが主体で、その比率は九州では縄文時代も弥生時代もほとんどの場合イノシシが多い。一方、積雪量との関係で説明されているように山陰から近畿北部ではシカが多いのは自然的要因を反映しているためである。次いでタヌキやアナグマも縄文時代のほうがより多く検出されている。

各遺跡における動物遺体の種構成は次のように3つに分類できる。イノシシ・シカを中心に多くの種類を少量づつづつもの(I類)、イノシシ・シカ・イヌ(特にイノシシ)を中心に1~4種類しか



表5 西日本を中心とした動物遺体一覧表2

| 遺跡名     | 所在地     | 時期    | 陸 棲 哺 乳 類  |            |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    | 海棲哺乳類 | 魚類   |     | 鳥類 | 文献(略) |    |    |      |      |      |     |
|---------|---------|-------|------------|------------|-----|------|---------|-------|-----|------|-----|-----|------|-------|-------|----|-------|------|-----|----|-------|----|----|------|------|------|-----|
|         |         |       | イノシシ       | イヌ         | タヌキ | アナグマ | ノコギリクサシ | ニホンザル | イタチ | ムサシビ | カモツ | キツネ | オオカミ | クワウソク | フキノトウ | リス | ネコ    | オコシロ | モグラ |    |       | ウシ | クマ | イノシシ | アライシ | カササギ | ササガ |
| 前田山     | 福岡県行橋市  | 弥生前   | ◎          | ○          |     |      | ○       |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 葛川      | 福岡県高田町  | 弥生前   | ○          | ○          |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 鹿部東町貝塚  | 福岡県古賀町  | 弥生前   | ○          |            |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    | ○     |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 下稗田     | 福岡県行橋市  | 弥生前   | 7          | 2?         | 2   |      | 2       |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 高橋貝塚    | 鹿児島県金峰町 | 弥生前   | 50<br>45.3 | 40<br>36.4 | 4   | 4    | 3       | 5     | 2   | 2    |     |     |      |       |       |    | 3?    | 1    |     | ○  |       |    |    |      |      |      |     |
| 門田貝塚    | 岡山県色久町  | 弥生前   | ○          | ○          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 下郡桑苗    | 大分市     | 弥生前中  | 7<br>87.5  |            | 1   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 綾羅木郡    | 山口県下関市  | 弥生前中  | 4          | 2          |     | ○    | ○       |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       | ○    | ○   | ○  | ○     |    |    |      |      |      |     |
| 田能      | 兵庫県尼崎市  | 弥生前中  | 15         | ○          | ○   |      |         |       | ○   |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| タテチョウ   | 島根県松江市  | 弥生前中  | ○          | ◎          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| #       | #       | 弥生中   | ○          | ◎          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 城ノ越貝塚   | 福岡県遠賀町  | 弥生前中  | ◎          | ○          |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 本分貝塚    | 佐賀県三養基郡 | 弥生中   | 3          |            | 2   |      |         | ○     |     |      |     |     |      |       |       |    |       | ○    |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 石丸3号貯蔵穴 | 福岡県宗像郡  | 弥生中   | 4          |            | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 詫田西分    | 佐賀県神埼町  | 弥生中   | 12<br>70.1 | 4<br>23.5  | 1   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    | 8     |      | ○   | ○  |       |    |    |      |      |      |     |
| 西川津     | 島根県松江市  | 弥生中   | 6          | 9          |     | ○    | ○       | ○     | ○   |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 池上      | 大阪府和泉市  | 弥生中   | 60<br>75   | 17         | ○   | ○    |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 恵智      | 大阪府八尾市  | 弥生中   | 24<br>68   | 5          | 5   |      |         |       | ○   |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 瓜生堂     | 大阪府東大阪市 | 弥生中   | ○          | ○          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 朝日 a    | 愛知県清洲町  | 弥生中   | 8<br>72.7  | 2<br>19.7  | 1   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| b       | #       | 弥生中   | 2<br>100   |            |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| c       | #       | 弥生中   | 10<br>71.4 | 2<br>14.3  | 2   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| d       | #       | 弥生中後  | 2<br>100   |            |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| e       | #       | 弥生後   | 1<br>100   |            |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| f       | #       | 弥生後   |            |            | 1   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 亀井      | 大阪府八尾市  | 弥生中後  | ○          | ◎          | ○   | ○    | ○       |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 鹿部東町    | 福岡県古賀町  | 弥生中後  | 3          | 2          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 原の辻     | 長崎県杵岐郡  | 弥生後   | ○          | ○          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 吉母浜     | 山口県下関市  | 古墳    | ○          | ○          |     |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 串島      | 長崎県大瀬戸町 | 7 C 末 | 4<br>36.4  | 6          | 1   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 海の中道    | 福岡市     | 8~10C | ○          | ○          | ○   |      |         |       |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |
| 高橋南貝塚   | 熊本市     | 鎌倉    | ◎          | ○          | ○   | ○    |         | ○     |     |      |     |     |      |       |       |    |       |      |     |    |       |    |    |      |      |      |     |

\*朝日遺跡の時期 (a.朝日式 b.朝日~貝田町式 c.貝田町 d.貝田町~高藏式 e.高藏式 f.山中式)



ないもの(Ⅲ類)、および中間的なもの(Ⅱ類)である。縄文時代にはⅠ類の構成を示すものが普遍的にみられるが、弥生時代にはⅠ類に属するものは少なく(高橋貝塚・菜畑の夜白、板付Ⅰ式期・西川津・亀井)、Ⅲ類が多い。しかも、表にはのせているが弥生時代には存在が疑問視されるウシ・ウマおよび自然に混入した可能性の強いネズミ・モグラを除外した場合、全出土個体数に占めるイノシシの比率が60%を越す弥生時代の遺跡が多い。縄文時代の西日本ではイノシシの占める率はせいぜい40%台であるのに比べ対称的である。イノシシを年齢構成の面からみると、若齢個体が多い例(下郡桑苗・本分貝塚・西川津・池上・吉母浜・朝日a、e・串島・高橋南貝塚)は弥生時代およびそれ以後に属し、かつイノシシの比率が高いものに多く認められる。若齢個体が目立たない例(陰田第9・日久美・草野貝塚・黒川洞穴・柏崎貝塚・被羅木郷・タテチョウ)ではイノシシの比率も低い。このように組成表からも、縄文時代晩期の山ノ寺式(菜畑遺跡)以後陸棲哺乳類の出土状況にそれ以前とは大きな差が認められそうである。下郡桑苗遺跡の場合はⅢ類のなかでも際立ってブタ(イノシシ)が多く、典型的な構成である。本遺跡の7個体というのは11~13層を一括した場合の数であって、層別に数えればもっと多くなる。朝鮮半島西北部の会寧五洞遺跡では、青銅器時代から初期鉄器時代にかけて野生動物のみの段階から家畜の出現・増加の経過が調べられている<sup>(註10)</sup>。これがそれぞれⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類に対応する可能性もあるが、今後の骨学的調査によらねば判断できない問題である。また、出土した下顎骨は枝の部分に孔があげられているが弥生時代にはこの種の例が多く、九州(菜畑・石丸・原ノ辻・佐賀県吉野ヶ里)・沖縄(渡喜仁浜原)・近畿(大阪府恩智・鬼鹿川・奈良県唐古・唐古鍵・亀井)・東海西部(三重県泉所)に広がっている。穿孔はないが下顎を特別に扱った例も広く分布し(長崎県浜郷・渡喜仁浜原・池上・唐古鍵)、弥生文化の開始以後イノシシ(ブタ)の下顎をもちいた儀礼が新たに始められたことをうかがわせる。

甲元真之氏は弥生時代にイヌ以外に家畜はいないとされてきたことに疑問をいだき、下顎をもちいた儀礼とともにイノシシやシカの骨を利用した占骨をとりあげ、「弥生人たちは決して動物と無縁な生活をおくっていたのではなくて、ある種の儀礼に使うため、いつも一定の動物を身近に飼育していたことが考えられ……略……儀礼そのものがすするとともに、動物の飼育を忘れていったとみるのが自然」だと述べている。死亡時期が月単位で推定できるようになれば、甲元氏の想定についてもっと細かい議論が可能となろう。氏によれば、「<sup>(註13)</sup>純日本紀」には8世紀前半の畿内地方でブタが飼育されていたことを示唆する記事がみられるという。7世紀末頃であるが、長崎県串島遺跡ではイノシシ4個体のうち3個体が幼若齢(M3が骨体内にあるものを含む)で、報告した木村幾多郎氏は「歴史時代におけるイノシシには幼若獣の比率が多いことは熊本市高橋南貝塚でも確認されている」と述べている<sup>(註17)</sup>。なお、高橋南貝塚は鎌倉時代の遺跡である。

今回の調査によって、弥生時代には日本列島の広い範囲でブタが飼育された疑いが生じたが、それが大陸のブタの系統のものであるのか従来のイノシシをブタ化したものであるのか、あるいは両者が共存したのか、検討する必要がある。ブタの認定にともない、考古学的にも骨学的にも種々の問題が派生してゆくと思われ、今後なすべき点は多い。

なお、佐原眞氏から関連する文献をいただいた。綿貫俊一氏には動物について種々教示を受けた。謝意を表したい。

- 註1 西木豊弘「美々4遺跡から出土した動物遺存体」『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』北海道文化財保護協会 1979
- 註2 金子浩昌「貝塚の獣骨の知識」考古学シリーズ10 東京美術 1984
- 註3 加藤晋平「縄文・弥生文化におけるイノシシ飼養—その系譜について—」『日本と東アジアの文化交流の基礎的研究』昭和56年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書 1982
- 註4 坂田邦洋「対馬の遺跡」長崎県文化財調査報告書第20集 1975
- 註5 註4におなじ。
- 註6 西田道世「阿高貝塚」城南町教育委員会 1978
- 註7 宮内克己「九州縄文時代土偶の研究」『九州考古学』№55 1980
- 註8 「浜ノ洲貝塚・丸子島古墳」熊本日々新聞社・三角町 1987
- 註9 金子浩昌「弥生時代の貝塚と動物遺存体」『三世紀の考古学』上巻 1979
- 註10 渡辺誠・磯谷和明「朝日遺跡の動物遺体」『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982
- 註11 丹羽百合子・金子浩昌「田能遺跡出土の動物遺存体」『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第15集 1982
- 註12 木村幾多郎「北部九州の弥生時代貝塚」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』上巻 1982
- 註13 井上貴央「西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について」『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅳ 鳥根県教育委員会 1988
- 註14 キム・シンギム「わが国の原始遺跡にみられる哺乳動物相Ⅰ・Ⅱ・完」『朝鮮学誌通報』X-6、XI-2・3 1973・1974
- 註15 甲元真之・山崎純男「弥生時代の知識」考古学シリーズ5 東京美術 1984
- 註16 「弥生文化の成立と東アジア」第3回国際シンポジウム福岡1989の講演
- 註17 木村幾多郎「串島遺跡出土の動物遺存体」『串島遺跡』長崎県文化財調査報告書第51集 1980



下郡桑苗遺跡近景  
(調査前)



調査風景



Ⅱ区水田遺構



Ⅲ区全景



Ⅲ区遺物出土状態

← プタNo.3



Ⅲ区木器・木材出土状況



上 プタNo.3 下 プタNo.1



図版3



← 木製容器

← 木椁

Ⅲ区木器出土状況



← 杓子状未製品

Ⅲ区木器出土状況



← 紡織具 (チキリ?)

Ⅲ区木器出土状況

図版4



木楸 (広楸)



木楸 (広楸)

板状加工品



紡織具 (チマキ?)



櫛状木製品

Ⅲ区木器出土状態

図版5



下郡桑苗遺跡の遺物（上：Ⅲ区13層 下：Ⅲ区12層）



下郡桑苗遺跡の遺物 (Ⅲ区11層)





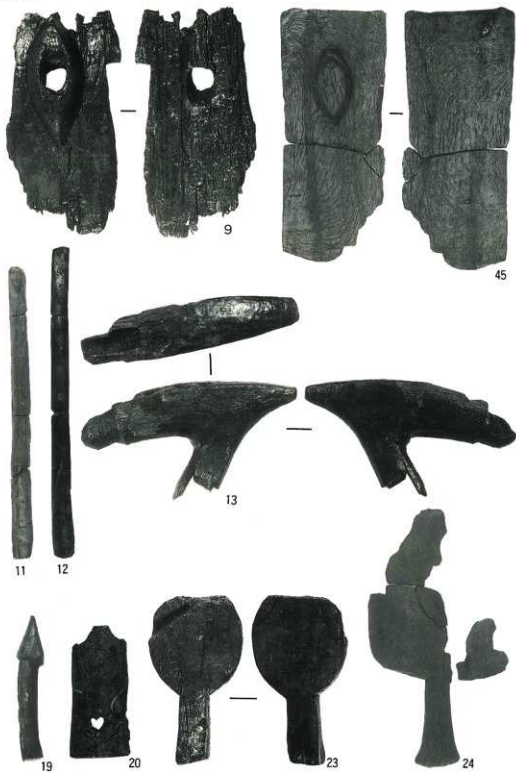
下郡桑苗遺跡の遺物（上：Ⅲ区11層 中：Ⅰ～Ⅳ区 下：縄文土器）



下郡桑苗遺跡の遺物（上：Ⅲ区11層の石器 下：柴田義弘氏採集資料）



下郡桑苗遺跡出土木器（鉄類）



下郡桑苗遺跡出土木器(柄、斧etc)



下郡桑苗遺跡出土木器 (弓、櫂状木器等)

## 下郡桑苗遺跡

大分県文化財調査報告書 第80輯

1989年3月31日

発行 大分県教育委員会  
大分市府内町3丁目10-1

印刷 日の丸印刷株式会社  
大分県別府市中央町9番15号

「下部桑苗遺跡」正誤表

| P. | L. | 誤                          | 正                            |
|----|----|----------------------------|------------------------------|
| 8  | 11 | ほぼ                         | ほぼ                           |
| 9  | 8  | 採り上げげ、                     | 採り上げ、                        |
| 19 | 15 | 隆起をもないもの                   | 隆起をもたないもの                    |
| 47 | 6  | 標準偏差                       | 標準偏差                         |
| 48 | 8  | 飯養されて                      | 飼養されて                        |
| 56 |    | 図版 動物遺体(3)<br>ブタ頭蓋骨 NO.1 約 | 図版 動物遺体(3)<br>ブタ頭蓋骨 NO.1 1/2 |